犀川鉄橋遺跡 II

1989

石川県立埋蔵文化財センター

犀川鉄橋遺跡 II

1989

石川県立埋蔵文化財センター

例　言

1　本書は、石川県金沢市本江・大豆田本・大和・長土塀・御影町地内に所在する犀川鉄橋遺跡の第３次発掘調査報告書である。

本遺跡については、石川県立埋蔵文化財センターが、昭和54年度と昭和56年度に第１次調査、第２次調査をそれぞれ実施し、昭和57年３月に刊行された『金沢市犀川鉄橋遺跡第１・２次発掘調査報告書　犀川環境整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書第１集』において、両調査の報告がなされている。

したがって、本書は第３次調査報告分として、表題を『犀川鉄橋遺跡Ⅱ』とした。

2　発掘調査は、犀川環境整備(河道整備)事業に係るもので、石川県土木部河川課の依頼を受け、石川県立埋蔵文化財センターが昭和60年度に実施した。調査および報告書刊行に係る費用は、すべて県土木部河川課が負担した。

3　現地調査期間は、昭和60年７月17日から８月20日までで、調査担当者は下記のとおりである。

栃木英道(埋蔵文化財センター主　事)

山本泰幹(埋蔵文化財センター調査員)

4　調査にあたっては下記の方々に参加いただいた。記して感謝の意を表する。

有江卓広、安斎　聡、今西　誠、梅本俊光、大森美紀、菊田由紀、小西　大、小山裕子、相良洋介、杉本憲子、関谷光生、高木有紀恵、館　宏樹、内藤　繁、野村映之、松島秀行、宮原広明、横田伸介、吉田悦子、余西昌幸、渡辺　功。(五十音順、敬称略)

5　遺物整理は、社団法人 石川県埋蔵文化財整理協会（担当者：辻森由美子、竹内弘美、松田智恵子、渡辺洋子）に委託した。期間は昭和63年８月26日～９月30日である。

6　本書の執筆・編集は栃木がおこなったが、「第４章第１節　考察」については、米沢義光氏(当時埋蔵文化財センター主事、現県立松任農業高等学校教諭)より原稿をいただいた。

7　本書における挿図等の扱いは下記のとおりである。

(1)　平面図に方位の指示のないものは、天地の軸を南北(上が真北)にとっている。

(2)　断面図の水準線に付した数字は標高で、単位はメートルである。

(3)　挿図の縮尺についてはスケールを付し、表題にも明示した。遺物のうち、土器は１／３、木器は１／４、土製品は１／２である。写真図版中の遺物の縮尺は不同である。

(4)　挿図、観察表、写真図版中の遺物の番号はすべて一致する。

(5)　本文中の参考文献、引用文献、註はすべて章末に掲げたが、第３章第２・３節および第４第１節については節末に掲げた。

8　本調査に関する実測図、写真、出土遺物等の資料は、石川県立埋蔵文化財センターが一括して保管している。貸出しをおこなっているので、学校教育ならび社会教育資料等として利用していただきたい。

目　　次

頁

例　言…… i
第１章　位置と環境 …… 1
　第１節　地理的環境…… 1
　第２節　歴史的環境…… 1
第２章　調査の経緯と経過…… 3
　第１節　調査に至る経緯…… 3
　第２節　調査の経過…… 3
第３章　調査区と出土遺物…… 6
　第１節　調査区…… 6
　第２節　出土・採集遺物…… 7
　第３節　出土・採集遺物の観察……11
第４章　まとめ ……27
　第１節　考　　察……27
　第２節　おわりに……30

挿図目次

頁

第１図　犀川鉄橋遺跡の位置(1/2,000,000) …… 1
第２図　犀川鉄橋遺跡と周辺の遺跡(S=1/25,000)…… 2
第３図　発掘調査区位置図(S=1/4,000) …… 4
第４図　第１調査区出土土器(S=1/3) …… 6
第５図　調査区平面図(S=1/800)、第２調査区土層断面図(S=1/40)…… 6
第６図　第２調査区出土土器(S=1/3) ……17
第７図　第２調査区出土土器(S=1/3) ……18
第８図　第２調査区出土土器(S=1/3) ……19
第９図　第２調査区出土土器(S=1/3) ……20
第10図　第２調査区出土土器(S=1/3) ……21
第11図　第２調査区出土土器(S=1/3) ……22
第12図　第２調査区出土土器(S=1/3)、土製品(S=1/2) ……23
第13図　採集土器(S=1/3) ……24
第14図　採集土器(S=1/3) ……25
第15図　採集土器(S=1/3)、木製品(S=1/4)……26

表 目 次

頁

第１－１表　出土遺物観察表……13
第１－２表　出土遺物観察表……14
第１－３表　出土遺物観察表……15
第１－４表　出土遺物観察表……16

図版目次

本文対照頁

図版第１　遺跡とその周辺(1947年撮影)…… 1
図版第２　上　第２調査区（東より）…… 6
　　下　第２調査区調査風景（西より）…… 6
図版第３　第１・２調査区出土土器…… 7
図版第４　第２調査区出土土器…… 7
図版第５　第２調査区出土土器…… 7
図版第６　第２調査区出土土器…… 7
図版第７　第２調査区出土遺物・採集土器…… 7
図版第８　採集土器・木製品…… 7

本文写真　**写真１**　重機の搬入作業　**写真２**　中洲遺物包含層露出状況（ともに５頁）

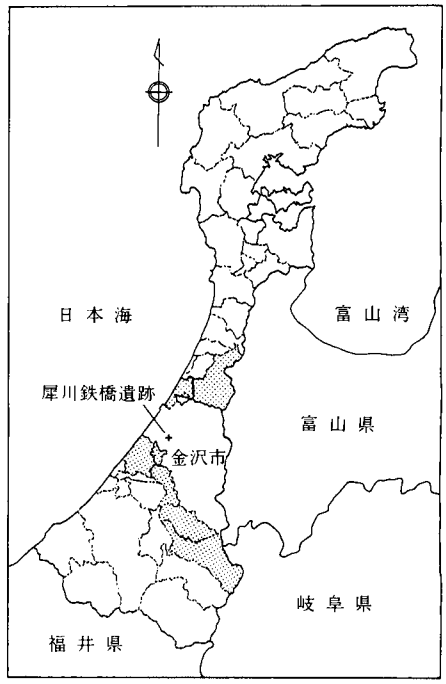
第１章　位置と環境（図版第１）

第１節　地理的環境（第１・２図）

犀川鉄橋遺跡は、北陸有数の都市である石川県金沢市に所在する。金沢市は面積468.09㎢を測り、北は河北郡内灘町・津幡町、東は富山県小矢部市、西砺波郡福光町、東砺波郡上平村、南は石川郡吉野谷村・河内村・鶴来町・野々市町、松任市の２市５町３村に接し、西は日本海に面している。

市内の地形は、概略南東部の山地・丘陵地帯と北西部の平野部に二分され、前者は加越山地、津幡・森本丘陵の、後者は金沢平野の一部をなす。上述の山地に源を発し北西流する大小河川のうち、市内中心部を貫流する犀川、浅野川の二大河川は、丘陵部で多くの河成段丘を生成する一方で、平野部をうるおしたのち日本海へあるいは河北潟へ注いでいる。

本遺跡は、その名が示すとおり、犀川に架かるＪＲ北陸本線犀川鉄橋付近に所在する。当地は、犀川が丘陵部を抜け平野部に出てほどなくの地点で、河口までの流程は７㎞強を測る。周辺は近年市街化が著しく、本調査が、市街地から下流へ順次進められてきた河道整備事業にともなうものであることが、それを端的に物語っている。

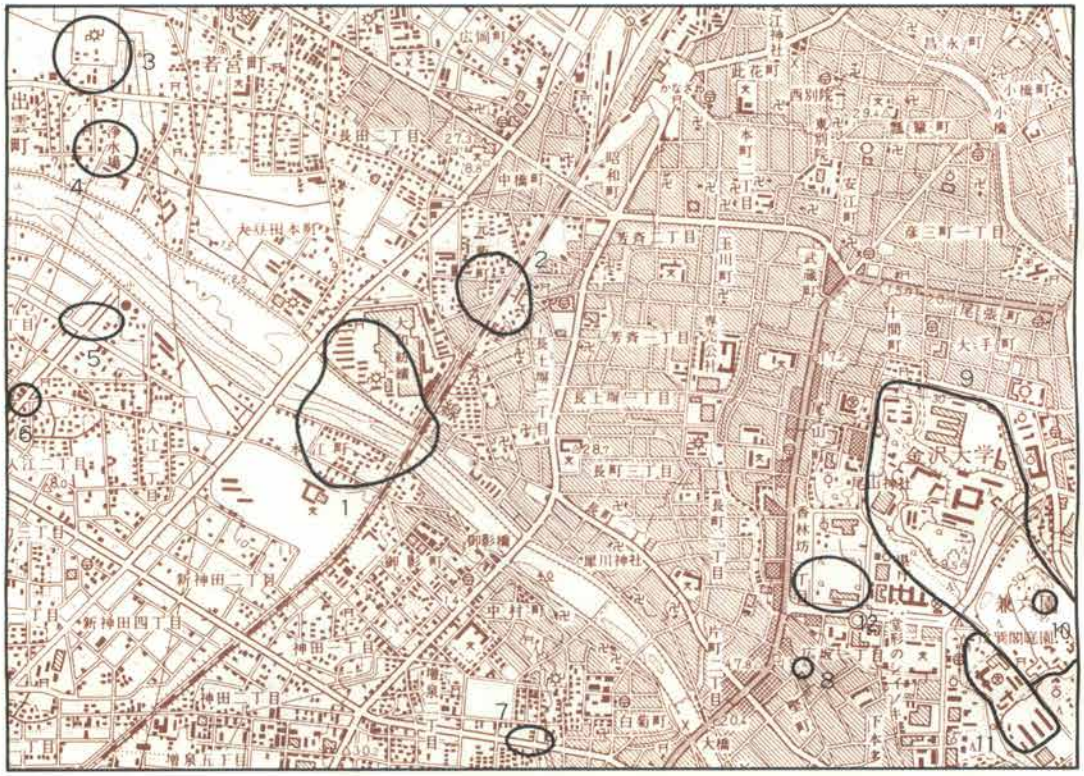


第１図　犀川鉄橋遺跡の位置
（Ｓ＝１／２,０００,０００）

第２節　歴史的環境（第２図）

本遺跡は、主として縄文時代後・晩期、古墳時代後期の遺物の散布地であり、現況は河床である。一般には集落の廃絶後に犀川の河道が変わったためと考えられているが、厚い礫の間に堆積する遺物包含(粘質土)層の状況は、必ずしも上記の想定に合致するものとはいえない。すなわち同層の堆積には整合性がなく、随所に乱れが認められ、遺構も検出されないのである。米沢義光氏が指摘するように、調査区とは別の地点に本来の遺物包含地があり、それらが洪水等によりブロックごと流出し、調査区内に再堆積した可能性はやはり否定できない。その場合、出土する土器片のなかに、器面の摩耗があまり進んでいないものや、大形の破片が少なからず認められることから、当該地は調査区からさほど離れていない地点と考えられるが、もとより現状では可能性の域を出るものではない。

さて、周辺の遺跡に目を転ずると、市街化が進んでいるためか、確認されている遺跡の分布密度はあまり高くない。縄文時代の遺跡では堅町遺跡(第２図８、以下同様)、兼六公園遺跡(10)、古墳時代では薬師堂遺跡(３)、玉鉾遺跡(６)、奈良・平安時代では玉鉾Ｂ遺跡(５)、増泉遺跡(７)、広



1　**犀川鉄橋遺跡(縄文、古墳)**　2　元菊町遺跡(中・近世)　3　薬師堂遺跡(古墳)　4　若宮遺跡(中世)
5　玉鉾B遺跡(奈良～平安)　6　玉鉾遺跡(古墳)　7　増泉遺跡(平安)　8　堅町遺跡(縄文)
9　金沢城跡(安土桃山・江戸)　10　兼六公園遺跡(縄文)　11　本多屋敷遺跡(近世)　12　広坂遺跡(平安)

第2図　犀川鉄橋遺跡と周辺の遺跡（S＝1／25,000）

坂遺跡(12)、中世以降では元菊町遺跡(2)、若宮遺跡(4)、金沢城跡(9)、本多屋敷遺跡(11)があげられる。このなかには、最近新たに確認されたもの(2)もあり、現状の分布が各時代のそれをそのまま反映したものとはいえない。すでに大部分が宅地化されているため困難な面も少なくないが、そうであればこそ、今後ともできる限り遺跡の分布やその内容・性格を確認していく作業が必要といえよう。

参考文献

浅香年木・田川捷一・他　『角川日本地名大辞典』　17　石川県　角川書店　1981年　東京。

石川県立埋蔵文化財センター編　『石川県遺跡地図』　石川県教育委員会　1980年　金沢。

米沢義光・平田天秋・芝田　悟　『金沢市犀川鉄橋遺跡第1・2次発掘調査報告書』石川県立埋蔵文化財センター　1982年　金沢。

第2章　調査の経緯と経過

第1節　調査に至る経緯(第3図)

犀川鉄橋遺跡は、昭和47年(1972年)7月、当時の泉中学校生徒が犀川中洲より縄文土器等を採集したことによって発見された。採集遺物は、昭和51年(1976年)、沼田啓太郎氏によって紹介され[(1)]、その後、昭和57年(1982年)に米沢義光氏によって追加紹介等がなされた[(2)]。

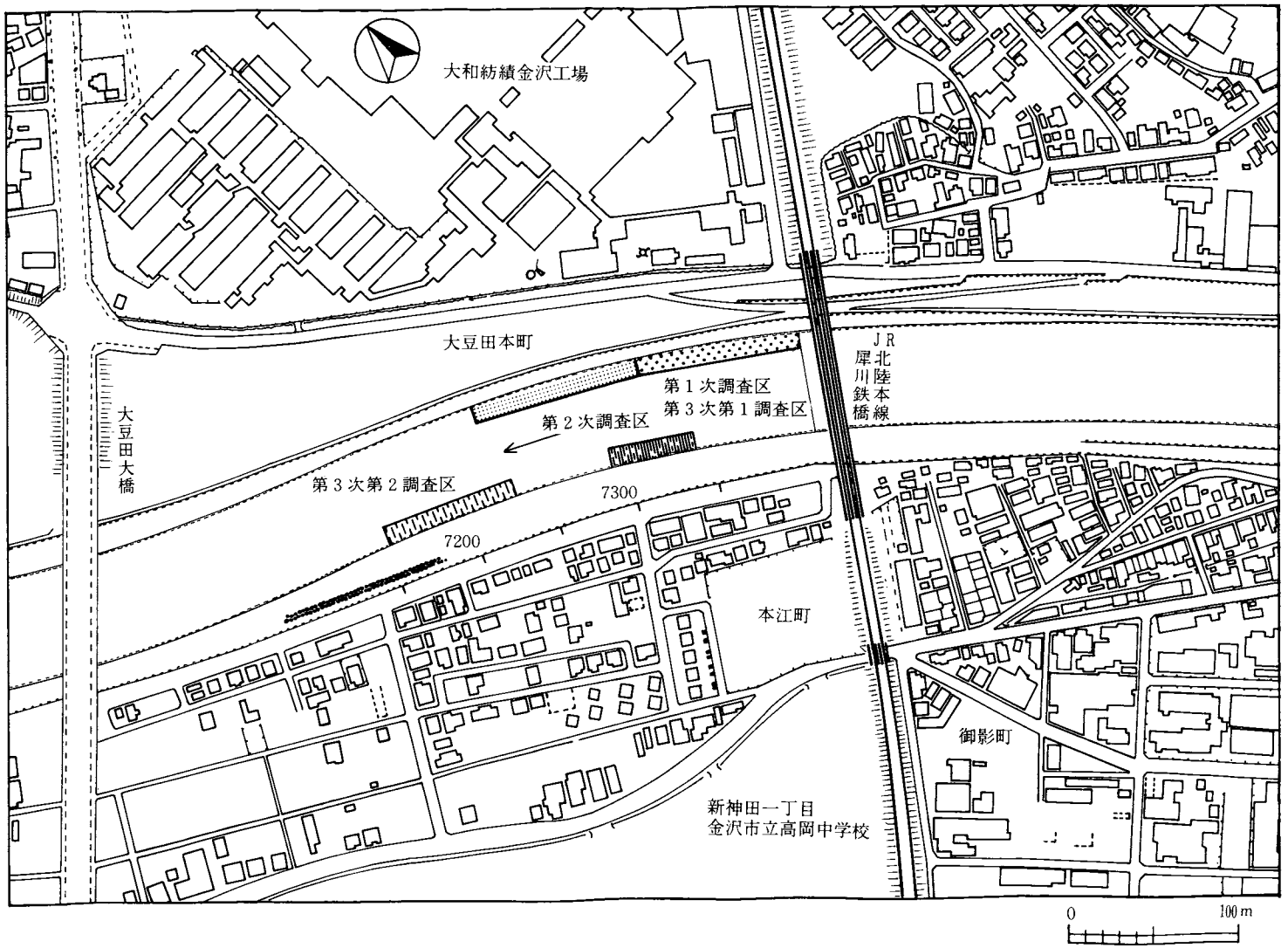
一方では、昭和46年から犀川環境整備事業が開始され、昭和53年からは御影橋～大豆田大橋間の工事が上流側から着工された。同年8月の文化財保護課(現文化課)による試掘調査の結果、昭和54年度以降の工事予定区域内に本遺跡が所在することが判明した。翌昭和54年には工事着手前に発掘調査を実施することで合意ができ、埋蔵文化財センターによって第1次調査がおこなわれた(7月30日～8月21日、右岸1,000㎡)。渇水期にあわせての調査ではあったが、犀川の増水によって調査区が水没し、礫の流入によって埋めもどされた状態となり、台風シーズンを前に調査終了を余儀なくされている。第2次調査は引き続いて実施の予定であったが、当センターの人員不足により一年繰り延べとなり、昭和56年におこなわれた(7月30日～8月21日、右岸1,000㎡)。好天に恵まれたこともあって、予定された調査区を下流側へさらに拡張し調査を終えている。なお、同年度には両調査の報告書が刊行されている(昭和57年3月)。

第3次調査は、第2次調査から数えて4年後の昭和60年におこなわれた。同年7月5日付で金沢土木事務所長より埋蔵文化財センター所長あて発掘調査の依頼がなされ、7月15日から8月8日にかけて、当センターが現地調査を実施し、8月20日に重機による調査区の埋めもどしをおこない作業を終了している。

第2節　調査の経過(第3図)

第3次調査は、当初コンクリート製低水護岸工事にかかる左岸500㎡(第1調査区、50m×10m)を対象としたが、礫層を除去したものの遺物包含層はほとんど検出されなかった。金沢土木事務所に確認したところ、過年度の右岸(第1次調査区の一部を含む)工事の際に、河道を左岸側へつけかえたとの回答を得た。工事にかかる河床の掘り下げとその後の水流によって、同層が流出したものと判断されたため、急遽左岸工事予定区域を下流へ向けて試掘したところ、調査区から80mの地点で遺物包含層が確認された。協議の結果計画を変更し、第1調査区の調査が終了したのち、引き続き同地点800㎡(第2調査区、80m×10m)を調査することとなった。なお第2調査区より下流は、現河道のため遺物包含層の有無は未確認である。この間、右岸よりの中洲で露出した遺物包含層が流出しつつあるのを発見し、若干の遺物を採集している。

調査が始まった7月17日は、金沢気象台より梅雨明け宣言が発表された日であり、以後一ケ月以上の長きにわたって真夏日が続き、調査中はついに一滴の雨も降らなかった。増水に備えて盛りあげた礫堤防によって風が遮断され、河原石の照りかえしと相俟って文字通り焼けつくような日々であった。その詳細は、以下の日誌に拠られたい。



第3図　発掘調査区位置図（S＝1/4,000）

調　査　日　誌

7月17日（水）　金沢土木事務所担当者と調査区の確認等打ち合わせ。重機の進入路がないため、クレーンで吊り上げて河原へ降ろすこととする。

7月18日（木）　調査区設定。周辺踏査。右岸よりの中洲で遺物包含層を確認。土師器・須恵器を採集。以後、調査終了まで断続的に遺物を採集する。

7月19日（金）　重機による礫層の除去。包含層が確認できず当惑。ユニットハウス、仮設トイレを設置する。

7月20日（土）　礫層の除去。包含層は検出されず、下流側へトレンチ（長さ30m）を入れる。包含層は確認できない。

7月22日（月）　調査区および周辺の清掃。並行して下流側へトレンチを延長（50m）。包含層を確認する。

7月23日（火）　調査区清掃、全体写真撮影。

7月24日（水）　調査区（以下、第1調査区と記す）平板測量。第2調査区設定。

7月25日（木）　第1調査区平板測量。第2調査区草刈りと清掃。

7月26日（金）　標高移動。第1調査区平板測量、調査終了。第2調査区清掃。

7月27日（土）　センターにて資料整理。

7月29～31日（月～水）　重機による第2調査区（以下、調査区と記す）の礫層の除去。ポンプによる排水作業。上流側から包含層を掘り下げる。

8月1日（木）　礫層の除去終了。毎朝調査区は冠水。ユニットハウスから調査区までのポンプの移動に苦労する。包含層より土偶が出土。

8月2・3日（金・土）　排水作業。包含層掘り下げ。

8月5日（月）　排水作業。包含層掘り下げ。調査区平板測量。土層断面実測。

8月6日（火）　排水作業。包含層掘り下げ。調査区平板測量。

8月7日（水）　排水作業。包含層掘り下げ。機材撤収準備。

8月8日（木）　第1、第2調査区周辺の清掃。周辺の踏査。機材撤収。

8月20日（火）　重機による第1、第2調査区の埋めもどし。現地作業を終了する。

（天候はすべて晴）

参　考　文　献

(1) 沼田啓太郎　「犀川河床より縄文」『石川考古学研究会々誌』　第19号　石川考古学研究会　1976年　金沢。

(2) 米沢義光　「金沢市立泉中学校保管犀川鉄橋遺跡採集土器」『金沢市犀川鉄橋遺跡第1・2次発掘調査報告書』　石川県立埋蔵文化財センター　1982年　金沢。

(3) 米沢義光・平田天秋・芝田　悟　『金沢市犀川鉄橋遺跡第1・2次発掘調査報告書』　石川県立埋蔵文化財センター　1982年　金沢。

写真1　重機の搬入作業

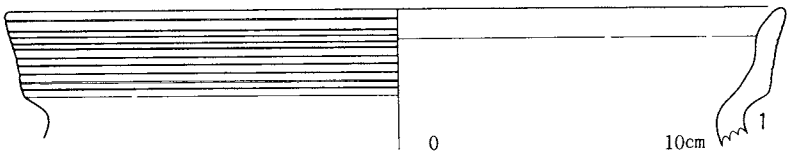
写真2　中洲遺物包含層露出状況

第３章　調査区と出土遺物

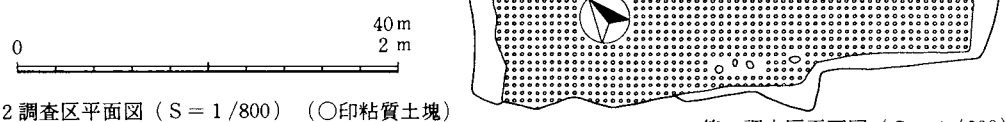
第１節　調査区（第４・５図、図版第２）

第１調査区は、第２章で述べたとおり、粘質土塊（標高7.2m前後）がわずかに残るのみで、出土遺物は第４図１・２の２点にすぎない。いずれも月影式期（弥生時代終末）あるいはその系譜をひく甕形土器片である。胎土・色調等は出土遺物観察表（第１－４表）を参照されたい。

第２調査区では、遺物を包含する粘質土層が約40mにわたって遺存する。もっとも厚いところで約40cmを測る。その平均的な標高は5.5m前後となろう。第２次調査の調査区土層断面図では７m前後を測ることから、河川の傾斜にそって同層が堆積していると考えることができる。同層は青灰色粘質土が主体を占め、暗灰色粘質土がブロック状に混入する。下部では鉄分を多く含み黄褐色を呈する。遺物は上下の別なく、下層礫との境界まで出土をみる。平面的にもまとまった状況は認められない。時期的には、極く少量の土師器が出土したほかは、ほとんどが縄文土器で占められる。第１次・第２次調査では、土師器・須恵器が比較的多く出土し、本調査で右岸よりの中洲から採集された土器も同様であった。右岸と左岸のこうした様相の相違は、遺跡内の地点別のそれと考えられるものの、他方では、縄文土器、土師器・須恵器が層序的に分離できないことから、第１章で述べたように、本遺跡の遺物包含層が本来の遺物包含地から流出再堆積したものと仮定すれば、本来の遺物包含地そのものの相違を示唆している可能性もある。

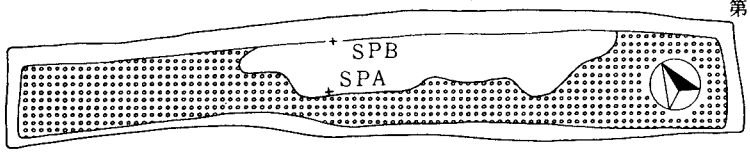


第４図　第１調査区出土土器（１・２，S＝1/3）



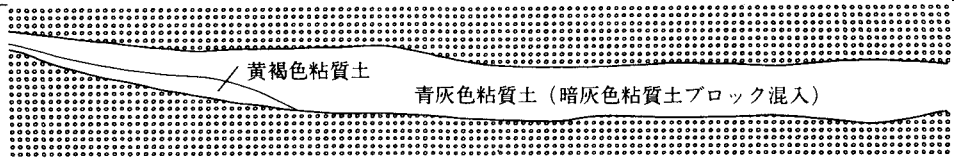
第２調査区平面図（S＝1/800）（○印粘質土塊）

第１調査区平面図（S＝1/800）



断面図上層礫は、ＳＰＡ・ＳＰＢの水準線からそれぞれ約1.3m、約３m堆積している。下層礫は鉄分を多く含む。

SPA　L.＝6.00m　第２調査区土層断面図（S＝1/40）　図中アミは礫。　SPB



第５図　調査区平面図（S＝1/800）、第２調査区土層断面図（S＝1/40）

第2節　出土・採集遺物(第6～15図1～194)

本調査において、第2調査区から出土した遺物と中洲等で採集した遺物の総量は、LⅡ型コンテナバット(60×37×14cm)で5箱(調査区出土4、採集遺物1)を数える。ここではそれらを縄文土器、土製品、土師器、須恵器、木製品の順に報告する。なお、個々の遺物の観察記録は、第1調査区出土の2点(第4図1・2)を含め次節(第1表)にまとめたので参照されたい。

1　縄文土器(第6～12図1～145、第13図147～171、図版第3～7)

縄文土器は、調査区出土145点(1～145)、採集遺物25点(147～171)を実測した。採集遺物のうち、第13図158は右岸のコンクリート製十字ブロック(給水塔付近)の奥から得たもので、他はすでに述べたとおり、右岸よりの中洲で一括採集したものである。以下、浅鉢、深鉢、他の順に報告する。

浅鉢(1～32、147、148、153、157、158、161、162、170)

浅鉢はA～Cの3形式に分類し、A・Cについてはさらに2～3細分した。

浅鉢A(1～11、13～17、147、158)　外傾する口縁部をもち、平縁のもの。

浅鉢A1(1～4、6、14、147)　口縁部が屈曲し、比較的幅広の面に2～5条の深く明瞭な沈線を巡らすもの。縦位短沈線(1)、同隆線(6)、連結三叉文と同沈線をもつもの(147)がある。

浅鉢A2(5、7～11、16、17、158)　口縁部が弱く屈曲するか単に面をもち、比較的幅の狭い同面に1～2条の沈線を巡らすもの。縦位短沈線(158)、同隆線(7、17)、連結三叉文と同隆線をもつもの(10、11、16、10は隆線間を縄文でうめている)がある。

浅鉢A3(13、15)　口縁部が弱く屈曲し、やや不明瞭な面(無文)をもつもの。15は第12図139(底部)と同一個体の可能性がある。

浅鉢B(29)　外傾する口縁部をもち、波状口縁のもの。波頂部に三叉文(抉り→縦位短沈線)を向かい合わせた連結三叉文をもつ(29)。

浅鉢C(18～28、30～32、148、161、170)　口縁部が内湾ぎみに直立ないしは内傾するもの。

浅鉢C1(18～23、30～32、161、170)　多条の横位(・縦位)の平行沈線に弧線(18、161他)、三叉文(18他)、連結三叉文(23他)、刺突文(20他)、笹の葉状区画文(30他)などを組み合わせたもの。

浅鉢C2(24～28、148)　縄文帯区画内に玉抱き三叉文をもつもの。

このほかに口縁部外面に隆線と背中合わせの弧線をもつ12(深鉢の可能性もある)、口縁部内面の沈線間の隆帯に単節斜縄文を施した153、肥厚した口縁端部に沈線等を施す157、口縁端部内面を肥厚させた162も、浅鉢あるいはその可能性があるものであるが、特に分類しなかった。

深鉢(33～53、55～78、80～135、148～152、154～156、159、160、163～168)

深鉢はA～Eの5形式に分類した。A・Bは精製深鉢といわれるものを主として施文される文様によって細分したもので、器面にナデ・ヘラ磨きなどの調整や地文としての縄文・条痕文を施し、さらに各種文様を施すものを包括する。C～Eは粗製深鉢といわれるものを主として器面に施された調整(地文)によって細分したもので、調整痕・地文のみからなるものを包括する。

深鉢Ａ(33～47、49～53、55～61、67、150、163)　口縁部、胴部に施された平行沈線を沈線や三角形の抉りで切るもの、菱形の抉り込み、連結三叉文、山字状三叉文などを施すもの。５細分したが、35、41、43、45～47、49、60、163は特に細分していない。

深鉢Ａ１(33、40)　横位の平行沈線を縦位の短い沈線で切るもの。

深鉢Ａ２(34、36、37)　横位の平行沈線を三角形状の抉り込みで切るもの。

深鉢Ａ３(39、42、44、50、52、53、59)　横位の平行沈線のなかに菱形の抉り込みをもつもの、あるいは波頂部に弧線、工字(もしくは土字)状三叉文をもつもの。39は38と同一個体(38の破片左端と39の破片右端が接合)である。

深鉢Ａ４(51、57、67、150)　横位の平行沈線のなかに連結三叉文、縦位短沈線を施すもの。51、57は波頂部に弧線をもち、51のそれは山字状三叉文となる可能性がある。また深鉢Ａ５とした61にも、深鉢Ａ４で包括した文様が施される。

深鉢Ａ５(55、56、58、61)　波頂部に山字状三叉文をもつもの。61には深鉢Ａ４で包括した文様も施され、56には深鉢Ａ３で包括した文様が施されている可能性がある。

深鉢Ｂ(48、62～66、68～71、73、74、77、149、152、154、159、164、166)

玉抱き三叉文または相対する同角三叉文(互いの角度が120度の三叉文)などをもつもの。３細分したが、48、65、69、70、73、152、164は特に細分していない。

深鉢Ｂ１(62、64、66、74)　横位の沈線の間などに相対する同角三叉文をもつもの。74は器面に無節縄文を施し、内面には入り組み三叉文を配している。

深鉢Ｂ２(63、68、71、77、149、159)　横位の沈線の間などに玉抱き三叉文をもつもの。

深鉢Ｂ３(154、166)　波頂部に単独三叉文(互いの角度が120度)をもつもの。

このほか、内面に沈線などを施す75・76、151・165、168、外面に沈線と縄文を施す78、160も精製深鉢といわれるものと考えられるが、特に分類はしなかった。また、外面に沈線を施す54、把手部片79は、それぞれ壺、浅鉢かとも考えたが、確証を欠くため分類の対象としなかった。

深鉢Ｃ(80～95、97～101、104、112、120、124、167)　器面(外面)に地文として縄文・撚糸文を施すもの。３細分した。

深鉢Ｃ１(81～88、90～95、97～101、104、167)　単節縄文を施すもの。83・98は細く、95は条痕文施文後に縄文を施文している。101は口縁端部にも施文している。

深鉢Ｃ２(80、112、120、124)　無節縄文を施すもの。

深鉢Ｃ３(89)　撚糸文を施すもの。

深鉢Ｄ(96、102、103、105～111、113～119、121～123、125～127)　器面(外面)に地文として条痕文を施すもの。３細分した。

深鉢Ｄ１(96、102、103、106～111、113～117、119、121～123、125)　横方向(主体)のもの。96と103、106と123はそれぞれ同一個体の可能性がある。

深鉢Ｄ２(118)　右下り方向のもの。

深鉢Ｄ３(105、126、127)　縦方向のもの。

深鉢Ｅ(128～135、155、156、165)　器面をナデ・ヘラ磨きなどの調整でしあげるもの。ただし、

129、130、133、165は摩耗のため調整等が判然としない。165(波状口縁)は内面に波線を施す。

このほか、浅鉢・深鉢の底部片12点(第12・13図136～145、169、171)を実測した。すでにふれたように、139は第6図15と同一個体の可能性がある。

2　土製品(第12図146、図版第7)

第2調査区から土偶が1点出土している。頭部、両腕、左乳、下半身を欠失するもので、残存高5.5cm、残存幅7.6cm、残存厚2.2～2.9cmを測る。器面には沈線と刺突文を施している。なお、正面中央右上から左下にかけての傷(アミ部分、一部)は調査時のものである。

3　土師器(第14・15図172～191、図版第8)

右岸よりの中洲で採集した土師器のうち、20点(甕形土器8点、小型土器5点、高杯形土器5点、甑形土器2点)を実測した。172～176はくの字口縁をもつ甕。172・173は外反する口縁の端部を先細りに、174・175は外傾する口縁の端部を肉厚な丸縁に、176は直立ぎみの口縁の端部を先細りにそれぞれしあげる。有段口縁をもつ177・178は甕と考えたが壺とすべきかもしれない。179はくの字口縁をもつ小形甕、口径12.4cmを測る。180～184は小型土器、小型丸底壺(181～184)あるいはそれに類似するもの(180)である。185～189は高杯、185・187～189は口縁～体部、186は脚部の破片である。190・191は甑、それぞれ把手・底部(多孔)の破片である。

4　須恵器(第15図192・193、図版第8)

右岸よりの中洲で須恵器を2点採集した。192は杯蓋、口径14.0cm、器高4.3cmを測る。193は杯身、口径12.0cm、器高5.5cm、たちあがり基部の径は13.9cmを測る。底部内面には、外面ヘラ削りの際の当て道具の痕跡が認められる。

5　木製品(第15図194、図版第8)

右岸よりの中洲で板梯子を1点採集した。乾燥後の数値ではあるが、残存最大長59.4cm、同最大幅13.1cm、厚さ2.7cm、足かけ部の残存最大厚は7.4cm(下段)を測る。残存部には上下二段の足かけ部があり、両段の比高差は32.7cmを測る。

6　小　結

以上、本遺跡第3次調査で出土・採集した遺物を、縄文土器、土製品、土師器、須恵器、木製品の順に報告してきたが、ここで若干のまとめをおこないたい。

縄文土器(・土製品)の大半は、本遺跡が位置する北加賀地域の土器編年にあてはめれば、第1・2次調査同様、縄文時代後期後葉八日市新保式～同晩期前葉御経塚式に比定し得る。時期比定が困難な個体についても、概ね上記の時期幅のなかにおさまるものと思われる。本調査の資料は、層位・地点別の検討が難しく大型破片も少ないことから、時期区分にあたってはそれぞれのメルク文様とされているものをその根拠とした。すなわち本章では、平行沈線を短い沈線や三角形の

抉りで区切る手法、平行沈線中の菱形の抉り込み、山字状三叉文を含む各種連結三叉文(交叉角度が90度のもの)、多条の平行沈線と笹の葉状区画文の組み合わせなどをもって前者八日市新保式とし、本章浅鉢Ａ１・２の一部(１・147他)、浅鉢Ｂ、浅鉢Ｃ１、深鉢Ａをそれにあてたい。同様に、縄文帯区画内の各種施文、相対する同角三叉(互いの角度が120度のもの)、玉抱き(同角)三叉文、単独(同角)三叉文などをもって後者御経塚式とし、本章浅鉢Ｃ２、深鉢Ｂをそれらにあてたい。個々の個体はもちろんのこと、大分類においても誤解や不適切な点が多々あると思われるが御容赦されたい。

ところで当初本項および次節では、八日市新保式と御経塚式が、西日本と東日本というそれぞれ異なる諸地域との関連性をもつ土器様式であるとの西野秀和氏等の指摘をうけ、系譜・系列を異にする両様式の接触をめぐる諸問題について検討を試みたが、筆者の力量不足のため断念した。それは土器編年についていえば、両様式の時期的な共伴と相互の影響関係、消長と(大)画期をめぐる問題(たとえばある地域において、八日市新保式系の器形に御経塚式系の文様が施されるような個体が存在する段階が設定できるとすれば、その段階にはすでに(勝木原・)御経塚式系の土器そのものが、その地域において出現しているのではないかといった問題)などである。こうした問題では層位学的な検討を欠くことができないが、層位・遺構別の検討が可能な資料、とりわけ同時性が高いと考えられる資料、そしてそうした検討そのものが現状では限られているようにみえる。もちろん型式学的な方法によっても検討は十分可能と考えるが、上記の分類の不備にみられるように、それは筆者のよくなし得るところではない。

土師器・須恵器については、概ね古墳時代後期の所産と考えられる。土師器のうち小型丸底壺(181～184)は、田嶋明人氏による漆町編年にあてはめれば、漆・12群土器に主体的なものであり、須恵器(192・193)は田辺昭三氏による陶邑編年のＭＴ－15型式に比定され、漆町編年では漆・15群土器(ＭＴ－15・ＴＫ10型式並行)に含まれるものである。したがって、全体としては一定の時期幅を考慮しなければならないであろう。なお、右岸よりの中洲での採集土器の主体が上記土師器・須恵器であることから、伴出の板梯子も該期の所産と考えておきたい。

参考文献

米沢義光・平田天秋・芝田　悟　『金沢市犀川鉄橋遺跡第１・２次発掘調査報告書』　石川県立埋蔵文化財センター　1982年　金沢。

西野秀和・垣内光次郎・本田秀生・他　『鶴来町白山遺跡・白山町墳墓遺跡(Ⅱ)』　石川県立埋蔵文化財センター　1985年　金沢。

南　久和・増山　仁・楠　正勝・他　『金沢市新保本町チカモリ遺跡―第４次発掘調査兼土器編―』　金沢市教育委員会　1986年　金沢。

高堀勝喜監修・山田芳和編集　『石川県能都町　真脇遺跡』　能都町教育委員会・真脇遺跡発掘調査団　1986年　石川県能都町。

田嶋明人・越坂一也・山本直人・他　『漆町遺跡』Ⅰ　石川県立埋蔵文化財センター　1986年　金沢。

田辺昭三　『須恵器大成』　角川書店　1981年　東京。

第3節　出土・採集遺物の観察(第1表)

本書に掲載した出土・採集遺物の観察記録は、本節第1表にまとめたので参照されたい。ここではその観察記録をもとに、縄文土器について若干の検討をおこないたい。

まず、器面に煤・炭化物の付着が認められる個体は、実測した個体についてみると(以下同様)浅鉢の約4割、深鉢の約7割5分を数える。浅鉢では浅鉢A1(・A3・B)が6割以上とやや多く、浅鉢Cが2～3割とやや少ない。深鉢では深鉢C・Dが約9割とやや多く、深鉢(A・)B(・E)が6～7割とやや少ない。また、器面に赤彩痕の認められる個体は、浅鉢では約2割5分を数えるが、深鉢では深鉢Bで約1割を数えるほかはほとんど認められない。浅鉢では浅鉢A1・C2が3～4割とやや多く、浅鉢A2(・A3・B)が1割以下とやや少ない。

一方、胎土中に含まれる砂礫の量は、浅鉢では1(極く少量)0.5：2(少量)2.5：3(中量)7となり、深鉢では2(少量)0.75：3(中量)7：4(多量)1.5：5(極めて多量)0.75となる。浅鉢では浅鉢A1(・A3・B)・C2の8割以上が3(中量)で占められるが、浅鉢A2・C1では約5割を1(極く少量)・2(少量)が占めている。深鉢では深鉢Bの8割以上が3(中量)で占められるが、深鉢Aでは3(中量)が約6割を占め、4(多量)が約3割を占める。また、主体となる砂礫の粒径は、浅鉢ではM(0.5～2㎜)とS(0.5㎜以下)が半々で、深鉢ではMが約8割、Sが約2割となる。ともにL(2㎜以上)を主体とするものはほとんど認められない。浅鉢では浅鉢C2のほとんどがMを主体とし、浅鉢A2では6～7割がSを主体とする。深鉢では深鉢B・D(・E)の約9割がMを主体とし、深鉢Cでは約4割がSを主体とする。

これらの数値には傾向性があり、器種・形式間の機能・用途差やそれらの様式(・時期)的差異を反映しているとみることもできるが、資料の抽出・分類・観察方法それ自体に問題点が多く、数値そのものが安定しているとはいえないため、今後の検討課題とすべきであろう。

さて観察では胎土中に含まれる砂礫等の構成についても注目した。土器の胎土(素地(粘土)＋混和材(砂礫等))が一般に当該土器の製作地の地質学的諸条件に規定されるという前提にたち、最近では奥田尚氏を中心に、混和材の肉眼観察によって在地製・非在地製(搬入)土器の推定等さまざまな検討が県内外で進められている[1]。今回は奥田氏の観察方法に準拠し、土器様式と胎土中の砂礫構成の対応関係の検討を目的として、類型化の作業をおこなった(第1表凡例参照)。

たとえば、縄文時代後期八日市新保式(およびその系譜をひく)土器と縄文時代晩期御経塚式土器のうち、それぞれ深鉢A・Bを例にとると、胎土類型との関係は、深鉢A(29点)では1類16点・55%、2類10点・35%、3類3点・10%、深鉢B(19点)では2類3点・16%、3類14点・73%、4類2点・11%となる。焼土塊・赤色酸化粒、生物の破片(海綿の骨片)を含む個体は、それぞれ深鉢Aで11点・38%、5点・17%、深鉢Bで10点・53%、3点・16%(生物の破片は実測点数169点のうち25点(15%)に含まれていた)となる。かりに大半の土器が在地で製作されたものであれば、こうした胎土類型(上述の砂礫量、主体となる砂礫の粒径、および焼土塊・赤色酸化粒含有率を含む)の傾向性の相異は、両形式(両土器様式)の土器の胎土製作にかかわる傾向性のそれを反映している可能性がある。

もちろん、作業にあたって具体的に岩石学研究者の指導を得ているわけではないため、岩石・

鉱物種の同定に不分明な点が多く、類型間の有意差についても岩石学的な根拠は希薄といわざるを得ない。搬入土器の有無も全く明らかではない。他方では両土器様式と各形式との対応関係が曖昧で、様式内の時期的な細分や両様式の共伴関係の検討も、前節でふれたとおり全くできていない。第1・2次調査出土資料をはじめ、周辺および関連遺跡出土資料との比較検討もおこなっていないため、前述の傾向性は、単なる土器(胎土)の多様性であったり、砂礫採取地の時期的な変化であったり、(小)地域間交流の結果等であったりするのかもしれず、今回の観察では、それらを土器様式との対応関係においてのみ積極的に評価することはできない。

しかしながら、土器の胎土が単に入手可能な素地(粘土)に手近な砂礫等を適当に混和するといった無頓着な方法でつくられるのではなくて、地質学的諸条件に規定されるとはいえ、「土器製作の流儀・作法としての伝統・約束を背景にも」ち、(焼成後の)「視覚的・触覚的な効果もあらかじめ意識的に目論[2]」みながらつくられていた可能性(胎土レベルにおいても、製作者(集団)が識別されていた可能性を含め)は否定できない。その意味で、八日市新保式・御経塚式両土器様式の胎土における個性の検証もまた、今後形態・文様等とともに両様式の接触や相互の影響関係等を考えるうえで有力な手段のひとつとなり得るのではなかろうか。

胎土分析(観察)は、最近さまざまな方法によって試みられ多方面で成果をあげているとはいえ、調査で得られたすべての資料を個々の研究者の指導を得て観察することは事実上不可能であることから、むしろ考古学研究者(とりあえずは報告者レベル)にあって、その目的とするところを含め、新たな胎土観察のありかたが摸索されるべき必要性を痛感している。今回の観察は意図したものとはかけ離れて全く中途半端なものとなったが、そうした試行(たぶんに錯誤かもしれないが)のひとつになればと考えている。

参考・引用文献

(1) a 奥田 尚・米田敏幸 「土器の胎土分析方法について」『古代学研究』 第99号 古代学研究会1983年。

b 狐塚省蔵・奥田 尚 「吉備型「器台・壺」胎土中の含有物」『古代学研究』 第109号 古代学研究会 1985年。

c 奥田 尚 「土器胎土の砂礫観察」『宿東山遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター 1987年 金沢。

d 奥田 尚 「砂礫の観察」『漆町遺跡』 Ⅱ 石川県立埋蔵文化財センター 1988年 金沢。

(2) 小林達雄 「総論—縄文土器の生態—」『縄文文化の研究』 5 縄文土器Ⅲ 雄山閣出版 1983年 東京。

第１表　出土遺物観察表

凡　例

1　図番号欄**左**：本文挿図番号、**中**：本文遺物番号、**右**：遺物・原図番号。

2　器種・形式欄**左**：器種、**中**：本書第３章形式、**右**：本書第４章形式。

3　色調欄：外面、内面の順に記載。一色は内外面同色。

4　煤・赤彩欄○印：煤・炭化物付着、△印：赤彩痕が認められるもの。

5　**砂礫量欄左ゴチック体**：胎土中の砂礫全体量、１：極く少量、２：少量、３：中量、４：多量、５：極めて多量。**右側**：主体となる砂礫の粒径、左：Ｌ（２㎜以上）、中：Ｍ（0.5㎜以上～２㎜未満）、右：Ｓ（0.5㎜未満）、０：なし、１：少ない、２：普通、３：多い。

6　その他の欄**左**：粒径（Ｌ・Ｍ・Ｓ）。**中**：含有物、焼：焼土塊（土器片？）、赤：赤褐色粒子（両者の厳密な区別は困難）。生：生物の破片（珪質海綿の骨片、白色針・棒状）。**右**：含有量、少：少量、中：中量、多：多量。

7　類型欄１：暗灰色～灰色を呈し、緻密でにぶい光沢をもつ粒形亜角の岩石（流紋岩・安山岩？）と無色（～灰色、半）透明で粒形角の石英（自形を含む）を主体とするもの。

２：１類と同様であるが、（３・）４類で主体的な砂礫も含まれるもの。

３：４類と同様であるが、１（・２）類で主体的な砂礫も含まれるもの。

４：乳白色～灰白色を呈し、結晶粒の集まりのような粒形角の岩石（花崗岩？）と灰白色半透明で粒形亜角の石英（ほとんどが他形）を主体とするもの。

a：焼土塊（土器片？）・赤褐色粒子を含むもの。

b：生物の破片（珪質海綿の骨片）を含むもの。

c：焼土塊・赤褐色粒子、生物の破片をともに含むもの。

第１－１表

図番号	器種・形式	色調外内	煤・赤彩	調整・施文文様、特記事項	砂礫量	その他	類型	図番号	器種・形式	色調外内	煤・赤彩	調整・施文文様、特記事項	砂礫量	その他	類型
6 1 105	浅鉢Ａ１Ａ①	淡灰褐、灰褐色	○外内面端部	ヘラ磨き、単節縄文、横位平行沈線、縦位短沈線	２１３２		1	6 14 112	浅鉢Ａ１Ａ②	淡灰褐色	△内　面	ヘラ磨き、横位平行沈線	３１２３	Ｍ赤少	２ａ
								15 102	浅鉢Ａ３Ａ⑥	灰褐～褐	○外内面	ヘラ磨き、12―139と同一か	３０２３		2
2 107	浅鉢Ａ１Ａ①	淡灰褐、淡橙灰色	○外面下位	外面摩耗、内面ヘラ磨き、横位平行沈線	３１２３		2	16 110	浅鉢Ａ２Ａ②	灰白色		磨、連結三叉文、縦位短隆線	３１２３	Ｍ赤少	２ａ
								17 109	浅鉢Ａ２Ａ②	褐色		磨、連三文？、縦短隆線３～	３１２３		4
3 117	浅鉢Ａ１Ａ①	褐　色	○外下位	ヘラ磨き、横位平行沈線	３１３２	Ｍ赤少	３ａ	18 11	浅鉢Ｃ１Ｃ②	灰褐色、淡褐色		ナデ、三叉文	１０２３	Ｍ生中Ｓ生多	１ｂ
4 111	浅鉢Ａ１Ａ②	灰白色	△外　面	ヘラ磨き、横位平行沈線	３０２３		2								
5 104	浅鉢Ａ２Ａ②	灰褐色	○外内端	ヘラ磨き？、横位平行沈線	３０２３	Ｍ生少	３ｂ	19 10	浅鉢Ｃ１Ｃ②	淡黄橙色	△外　面	内面摩耗、縦横位沈線	２１３２		3
6 119	浅鉢Ａ１Ａ②	淡灰褐、灰白色		ヘラ磨き、横平行沈線、縦短隆線、焼成後孔１径４～８㎜	３０２３		3	20 60	浅鉢Ｃ１Ｃ②	淡灰褐、灰褐色		内面摩耗、沈線、刺突文、三叉文	２１３２		2
7 118	浅鉢Ａ２Ａ②	灰褐色	○外上位△外口端	摩耗、横位沈線、縦位短隆線３	３１２３		3	21 159	浅鉢Ｃ１Ｃ②	黄橙色、灰白色	△外　面	内面摩耗、沈線、刺突文	２０２３		3
8 103	浅鉢Ａ２Ａ③	灰褐色、淡灰褐色	○外　面	外ヘラ磨き、内摩耗、横位沈線	２１２３		4	22 15	浅鉢Ｃ１Ｃ②	暗灰褐、灰褐色、		ヘラ磨き、横位平行沈線、刺突文	２２２２	Ｓ赤少	３ａ
9 120	浅鉢Ａ２Ａ③	淡灰褐、灰白色	○外　面	ヘラ磨き、横位沈線	２１２３	Ｌ焼少Ｓ赤少	２ａ	23 12	浅鉢Ｃ１Ｃ②	淡褐色	△外　面	内面ナデ、沈線、連結三叉文	２０２３		2
								24 19	浅鉢Ｃ２Ｃ①	赤褐色、	△内面？	内面ナデ、縄文、沈線	３１３２		4
10 108	浅鉢Ａ２Ａ③	灰褐色、暗灰褐色		ヘラ磨き、単節縄文ＲＬ、連結三叉文、縦位短隆線	２０３２		4	25 5	浅鉢Ｃ２Ｃ①	灰白色	△外内面	摩耗、縄文、玉抱き三叉文	３１３２	Ｍ赤中Ｓ赤中	４ａ
11 113	浅鉢Ａ２Ａ③	黄橙色、灰白色		ヘラ磨き、連結三叉文、縦位短隆線	２０２３	Ｍ赤中	４ａ	26 8	浅鉢Ｃ２Ｃ①	淡茶褐色		摩耗、玉抱き三叉文	３１３２		3
								27 6	浅鉢Ｃ２Ｃ①	灰白色		摩耗、縄文、三叉文	３１３２		2
12 114	（浅鉢）Ａ⑤	黄橙色、淡黄橙色		ヘラ磨き、横位弧線、縦位短隆線？	３１３２		3	28 4	浅鉢Ｃ２Ｃ①	灰褐色、灰白色	○外　面△外　面	外面ヘラ磨き、内面摩耗、単節縄文、玉抱き三叉文	３１３２	Ｍ赤少Ｓ赤少	３ａ
13 106	浅鉢Ａ３Ａ⑥	灰白色	○外　面	ヘラ磨き、	３１３２	Ｍ赤少	２ａ	29 101	浅鉢Ｂ　Ｂ	灰褐色	○外内面	外面ヘラ磨き、内面ナデ、横	３０２３	Ｍ赤少	２ａ

第1－2表

図番号	器種・形式	色調外内	煤・赤彩	調整・施文文様、特記事項	砂礫量	その他	類型	図番号	器種・形式	色調外内	煤・赤彩	調整・施文文様、特記事項	砂礫量	その他	類型
				位平行沈線、連結三叉文		S赤少				橙褐色		三叉文		M赤中	
6 30 116	浅鉢C1C②	淡灰褐色		ヘラ磨き、平行沈線、笹の葉状区画沈線文	3321	M赤少	2a	8 56 30	深鉢A5A②	褐色	○外内面	ナデ、横平沈、山字状三叉文	2032		1
						S赤少		57 27	深鉢A4A②	灰褐色	○外 面	外ナ、内摩、横平沈、連結三	3232	M生少	2b
31 115	浅鉢C1C②	淡灰褐色		内面ナデ・ヘラ削り、平行沈線、笹の葉状区画沈線文	3132	S赤少	2a					叉文、縦短沈線、弧線		S生中	
32 58	浅鉢C1C②	淡灰褐、灰褐色	○外 面	内面ナデ・ヘラ磨き、平行沈線 笹の葉状区画沈線文	3123	M生中	1b	58 32	深鉢A5A②	淡橙褐、橙褐		外面摩耗、内面ナデ、沈線、山字状三叉文	5232	S赤少	2a
						S生中		59 41	深鉢A3A②	灰褐色～黒褐色	○外 面	ヘラ磨き、横位平行沈線、菱	3132	M生少	1b
7 33 1	深鉢A1A①	茶褐、茶褐～黒褐	○外内面	内面ヘラ磨き、単節縄文RL、横位平行沈線、縦位短沈線	4123	M焼中	3a					形の抉り、工(土) 字状三叉文		M生中	
						S赤少		60 48	深鉢A A②	橙色、黄橙色		摩耗、横位沈線、縦位沈線、L灰色土魂多	5232	M焼多	2c
34 39	深鉢A2A①	暗褐色、褐色	○外 面	ヘラ磨き・ナデ、横位平行沈線、三角形抉り	4032		3							S生少	
								61 28	深鉢A5A②	褐～暗褐	○外内面	ナデ、横平沈、連結三叉文、縦位短沈線、山字状三叉文、	2132		1
35 34	深鉢A	褐色	○外 面	ナデ・ヘラ磨き？、沈線	4132		1								
36 22	深鉢A2A①	褐色		ナ・磨、横平沈、三角形抉り	3023		2	62 37	深鉢B1B①	褐色～暗褐色	○外 面	ナデ、横位平行沈線、相対同角三叉文	3132	M焼少	3a
37 43	深鉢A2A①	暗灰褐色	○外 面	ナ、横平沈、三角形の抉り	3032		2								
39 29	深鉢A3A②	灰褐色、淡灰褐色	○外 面	ナデ、単節縄文、平行沈線、菱形の抉り、38 (51) と同一	3032	M生中	1b	63 20	深鉢B2B①	灰褐色		内摩、玉抱三叉文、円形刺突	3132	M赤少	4a
						S生中		64 40	深鉢B1B①	灰褐色～暗灰褐色	○外 面	外面条痕文→ナデ、横位平行沈線、相対同角三叉文	3132	S生少	3b
40 33	深鉢A1A①	褐、暗褐	○外 面	ナデ、横平沈、縦位短沈線	3132		1								
41 50	深鉢A	褐、黒褐	○外内面	内面ヘラ磨き、横位平行沈線	3023		1	65 21	深鉢B B①	乳白色		外摩、横平沈、相同三？	4032	M赤中	3a
42 36	深鉢A3A②	褐、暗褐～黒褐色	○外 面	ヘラ磨き、横位平行沈線、菱形の抉り	3232	M赤少	1a	66 42	深鉢B1B①	茶褐色、暗茶褐色	○外 面	単節縄文、横位平行沈線、相対同角三叉文	3132	S赤中	3a
43 156	深鉢A	褐、黒褐	○外 面	ヘラ磨き、横位平行沈線	3232		1	67 57	深鉢A4B①	橙褐色、灰褐色		外磨、横位平行沈線、連結三叉文、縦位短沈線	3132		3
44 23	深鉢A3A②	褐～黒褐	○外内面	磨、横平沈、菱形の抉り	4232		2								
45 55	深鉢A	淡褐、褐	○外内面	摩耗、横位平行沈線	3132	S赤中	1a	68 47	深鉢B2B①	褐、灰褐	○外 面	外磨、内ナ、横平沈、玉抱三	3132		3
46 2	深鉢A	淡褐～橙褐～黒褐		外面摩耗、内面ヘラ磨き、横位平行沈線	4132	M赤少	1a	69 49	深鉢B	淡褐色		摩耗、横位平行沈線	3132	M焼少	3a
								70 53	深鉢B B①	褐、灰褐	○外 面	摩耗、横位平行沈線	3132	M赤少	3a
47 45	深鉢A	黄橙色		摩耗、横位平行沈線	4132	M赤少	2a	71 25	深鉢B2B①	暗灰褐色	○外内面	ナデ、横平沈、玉抱き三叉文	3032	M赤多	3a
48 52	深鉢B B①	褐～黒褐、暗灰褐	○外 面	ヘラ磨き、単節縄文RL、横位平行沈線	3132		3	72 18	深鉢	暗灰褐色	○△外内	磨、単節縄文、平行沈線	3023		4
								73 31	深鉢B B①	暗褐色	○外 面	磨、平沈、相対同角三叉文	3132		2
49 54	深鉢A	黄橙褐色		外磨、内摩、横平沈、刺突文	4132		2	9 74 14	深鉢B1B①	黄橙色	△外内面	無縄L、相同三、入組三叉文	2023	M生中	3b
50 38	深鉢A3A②	褐色	○外 面	外ナ、内磨、弧線、菱形抉り	3023	S赤少	1a	75 16	深鉢	灰褐色		外ナ、内磨、沈線	3132	M赤少	3a
51 26	深鉢A4A②	淡赤褐、灰褐色		内面ヘラ磨き、連結三叉文、縦位短沈線	3023		2	76 13	深鉢	灰褐色	○外 面	ナデ、沈線	3132		3
								77 9	深鉢B2B①	灰白色	△外 面	摩、単縄、沈線、玉抱三叉文	3132	M生少	3b
52 44	深鉢A3A②	褐色	○外 面	外面ナデ、横位平行沈線、工(土) 字状三叉文	3123		1	78 17	深鉢	暗灰褐色	○外内面	磨、縄文、沈線	2032		2
								79 3		暗灰褐色	○△外面	外磨、内ナ、単縄LR、沈線	3132		3
8 53 35	深鉢A3A②	褐、黒褐～灰褐色	○外内面	磨、横平沈、菱形の抉り	3132	M赤少	1a	80 71	深鉢C2	灰褐色	○外 面	内ナデ、外無節縄文L	3132		3
54 158				ナデ、沈線	3132		3	81 91	深鉢C1	灰褐色	○外 面	内ナデ、外単節縄文RL	3132	L生中	3c
55 24	深鉢A5A②	淡黄橙色、	○外 面	摩耗、横位平行沈線、山字状	4132	L焼少	2a							M生中	

図番号	器種・形式	色調外内	煤・赤彩	調整・施文文様、特記事項	砂礫量	その他	類型	図番号	器種・形式	色調外内	煤・赤彩	調整・施文文様、特記事項	砂礫量	その他	類型
						S赤少		11 115 74	深鉢D1	暗灰褐色	○外面	内ナデ、外条痕文	3'2 3 1	M焼少	2a
9 82 92	深鉢C1	灰褐色	○外面	内削り・ナデ、外単縄RL	4 1 3 2	S赤少	2a	116 79	深鉢D1	褐色	○外面	内磨、外条痕文	3 1 3 2	M赤少	2a
83 77	深鉢C1	灰褐色		内ナデ、外単節縄文RL	4 2 2 2	S赤中	2a	117 89	深鉢D1	黒灰色	○外面	内磨、外条痕文	3 0 3 2		1
84 72	深鉢C1	黄灰褐色	○外面	内ナデ、外単節縄文LR	3 0 2 3	M生中	1b	118 63	深鉢D2	淡橙褐色	○外面	内ナデ？、外条痕、MS赤多	5 1 2 3	赤多	3a
85 76	深鉢C1	淡灰褐色	○外面	内ナデ、外単節縄文LR	4 0 2 3		2	119 82	深鉢D1	灰白色～	○外面	内ナデ、外条痕文	3 1 3 2	M赤少	3a
86 85	深鉢C1	灰褐色	○外面	内ナデ、外単節縄文	3 1 3 2	S赤少	2a			灰褐色				S赤中	
87 96	深鉢C1	黄灰褐色		内ナデ、外単節縄文LR	3 0 3 2	S赤少	2a	120 64	深鉢C2	灰褐色		内磨、外無節縄文L	3 0 3 2		2
88 80	深鉢C1	灰褐色	○外面	内ナデ、外単節縄文LR	3 0 2 3	S赤中	1a	121 66	深鉢D1	淡灰褐色		内ナ、外条痕、赤M小S中	3 1 3 2	赤	2a
89 95	深鉢C3	灰褐色	○外面	内ナ、外磨・撚糸、孔5～12mm	3 1 3 2	M生少	2b	122 86	深鉢D1	橙褐～褐	○外面	内ナ、外条痕、生赤M中S多	2 1 3 2	生赤	2c
10 90 167	深鉢C1	灰褐色	○外内面	内ナ、内ナデ・単節縄文RL	3 1 2 3		1	123 89	深鉢D1	灰褐、灰	○外面	内ナ、外条、10—106と同一？	3 1 3 2		3
91 168	深鉢C1	褐色	○外面	内ナデ、外単節縄文RL	4 0 3 2	M生少	3b	124 81	深鉢C2	淡灰褐、	○外面	内ナデ、外無節縄文L→一部	3 1 2 3	M赤中	3a
92 170	深鉢C1	灰褐色	○内面	内ナデ、外単節縄文LR	3 0 3 2	M生中	1b			黄橙色		ナデ		M赤多	
93 169	深鉢C1	褐、灰褐	○外面	内ナデ、外単節縄文LR	3 0 3 2	M生中	1b	125 67	深鉢D1	淡黄、灰		内摩耗、外条痕文	5 0 2 3	M生少	2b
94 173	深鉢C1	灰褐色	○外面	内ナデ、外磨・単節縄文RL	3 0 3 2		3	126 163	深鉢D3	橙褐色	○外面	内ナデ、外条痕文	5 2 3 2	M焼少	2a
95 61	深鉢C1	灰褐色	○外面	内ナ、外条痕→単節縄文RL	3 1 3 2		1	127 70	深鉢D3	淡褐、褐	○外面	内ナデ、外条痕文	3 1 3 2		2
96 62	深鉢D1	褐、灰褐	○外面	内ナデ、外条痕文、孔径7～	3 1 3 2		3	12 128 98	深鉢E	橙褐色		ナデ	3 1 3 2	M赤少	3a
		～暗灰色		11mm、10—103と同一個体か				129 68	深鉢E	灰褐色		摩耗（ナデ？）	5 0 3 2	S赤少	3a
97	深鉢C1	灰褐色	○外面	内ナデ、外単節縄文LR	5 0 3 3		1	130 99	深鉢E	灰褐色～		外摩耗（条痕→ナデ？）、内	3 0 3 2	M生少	2c
98 78	深鉢C1	灰褐色	○外面	内ナデ、外単節縄文RL	3 1 3 2		4			暗灰褐色		ナデ		M赤少	
99 171	深鉢C1	灰褐色	○外面	内ナデ、外単節縄文	3 1 3 2		2	131 83	深鉢E	褐、灰褐	○外面	ナデ	4 0 3 2	M生少	2b
100 84	深鉢C1	褐、淡褐	○外面	内磨、外単節縄文LR→一部ナ	2 0 2 3		1	132 69	深鉢E	灰褐色		ナデ	3 1 3 2	M生少	2b
101 46	深鉢C1	褐、灰褐	○外面	内磨、外単節縄文RL→一部ナ	2 0 2 3		1	133 65	深鉢E	黄橙色		摩、（外条？）、赤L少M中	5 1 3 2	S赤多	3a
102 165	深鉢D1	褐、暗褐	○外内面	内ナデ、外条痕文	4 0 2 3	M赤少	3a	134 73	深鉢E	灰褐色	○外面	ナデ	3 1 3 2	S赤少	2a
103 174	深鉢D1	褐、灰褐	○外面	内ナデ、外条痕文、10—96と	3 1 3 2	M赤少	3a	135 178	深鉢E	灰、淡灰	○外面	ナデ	2 1 3 2		2
		～暗灰色		同一個体か				136 127	（底部）	黄橙色	○外内面	外摩（磨？）、内ナ、網代圧痕	4 0 3 2		2
104 75	深鉢C1	褐～淡褐	○外面	内ナ、外単節縄文LR→一部ナ	2 0 3 2	M生少	1b					2本越え2本潜り1本送り			
105 162	深鉢D3	褐、灰褐	○外面	内ナデ、外条痕文	4 0 3 2		3	137 131	（底部）	灰褐色		ナデ	4 0 2 3		2
106 161	深鉢D1	灰褐、灰	○外面	内ナ、外条、11—123と同一？	3 1 3 2		3	138 130	（底部）	灰褐色		外単節斜縄文LR、内ナデ、	3 2 3 2		2
11 107 121	深鉢D1	橙褐色	○外面	内ナ、外条、L～S赤中	3 2 3 2	赤中	3a		（深鉢C1）			底2越2潜1送			
108 93	深鉢D1	褐、淡褐	○外内面	内磨、外条痕文→一部ナデ	2 2 3 2		2	139 124	（底部、浅鉢	灰褐色～	○外内面	外磨？、内ナデ、6—15と同	3 0 2 3		2
109 88	深鉢D1	褐、暗褐	○外内面	内磨・ナデ、外条痕文・ナデ	3 1 3 2		2		A3、A⑥）	褐色		一個体か			
110 97	深鉢D1	灰褐色～	○外面	内ナデ、外条痕文、波状口縁	3 1 3 2	M生少	2b	140 179	（底部）	黄褐色	○外内面	ナデ	3 1 2 3		2
		淡黄灰色						141 128	（底部）	褐～橙褐	○外内面	ナデ、底2越2潜1送	3 1 2 3		3
111 100	深鉢D1	灰褐色		内ナデ、外状痕文、波状口縁	3 0 3 2		3	142 123	（底部）	灰褐色		磨？	3 1 3 2		2
112 87	深鉢C2	黄橙色	○外面	内ナデ、外無節縄文L	3 0 2 3	M生中	3a	143 129	（底部）	暗灰褐色		外磨、ナデ、内ナデ	3 1 3 2		2
113 90	深鉢D1	褐～灰褐	○外面	内ナデ、外条痕文	3 1 3 2		3	144 122	（底部）	灰白色		ナデ、底2越2潜1送	5 1 3 2	M赤少	2a
114 166	深鉢D1	灰褐色	○外面	内ナデ、外条痕文	3 1 3 2	M赤少	3a	145 126	（底部）	橙褐色、	○外内面	ナデ	4 3 2 1	M焼少	1a

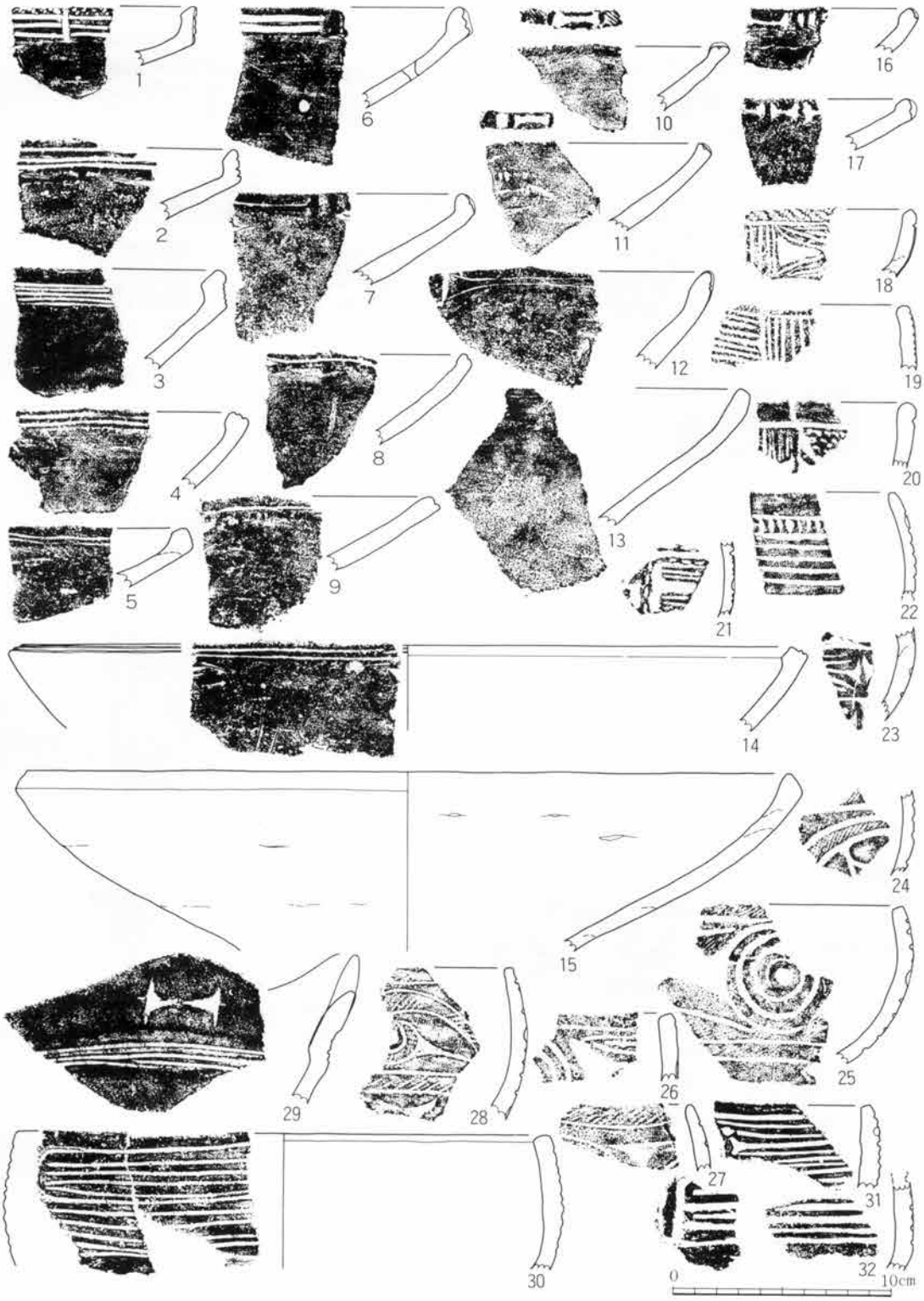
第1－4表

図番号	器種・形式	色調外内	煤・赤彩	調整・施文文様、特記事項	砂礫量	その他	類型
		灰白色				S赤少	
12 146	土偶	茶灰色		沈線、刺突文	2 1 2 3		1
13 147 135	浅鉢A1A①	橙褐色	○外 面	外磨、内ナデ、横位平行沈線	3 0 3 2	M焼少	1 a
			△外沈線	連結三叉文、縦位単沈線			
148 136	浅鉢C2C①	暗灰褐色		内ナデ、無節斜縄文、沈線	3 0 3 2	M赤少	3 a
149 134	深鉢B2B①	灰褐色	○外 面	内ナデ、単節斜縄文LR→一部磨、玉抱き三叉文	3 1 3 2	S赤少	4 a
150 133	深鉢A4A②	褐色	○外 面	内ナ、横平沈、連三、縦短沈	3 0 2 3		1
151 137	深鉢	灰褐～黒		ナデ、単節斜縄文LR、沈線	3 0 3 2	M赤少	3 a
152 146	深鉢B	灰褐色	○外 面	ナデ、沈線	2 0 2 3		2
153 142	浅鉢 A⑦	灰褐色	○外内面	ヘラ磨き、単節斜縄文LR、	3 0 3 2	M焼少	3 a
			△内 面	沈線			
154 138	深鉢B3B②	黄橙～黒	○外 面	ナデ？、沈線、単独三叉文	3 1 3 2	S赤少	2 a
155 150	深鉢E	褐色	○外 面	ナデ	3 1 3 2		2
156 149	新鉢E	暗褐色	○外内面	内ナデ、外磨、波状口縁	3 0 2 3		2
157 141	浅鉢	灰黄褐色	△口縁端	外磨？、内ナデ、沈線	3 0 3 2	M焼少	4 a
158 144	浅鉢A2A④	淡灰褐、		外ナデ、内磨、連結三叉文、	3 0 3 2	M赤中	3 a

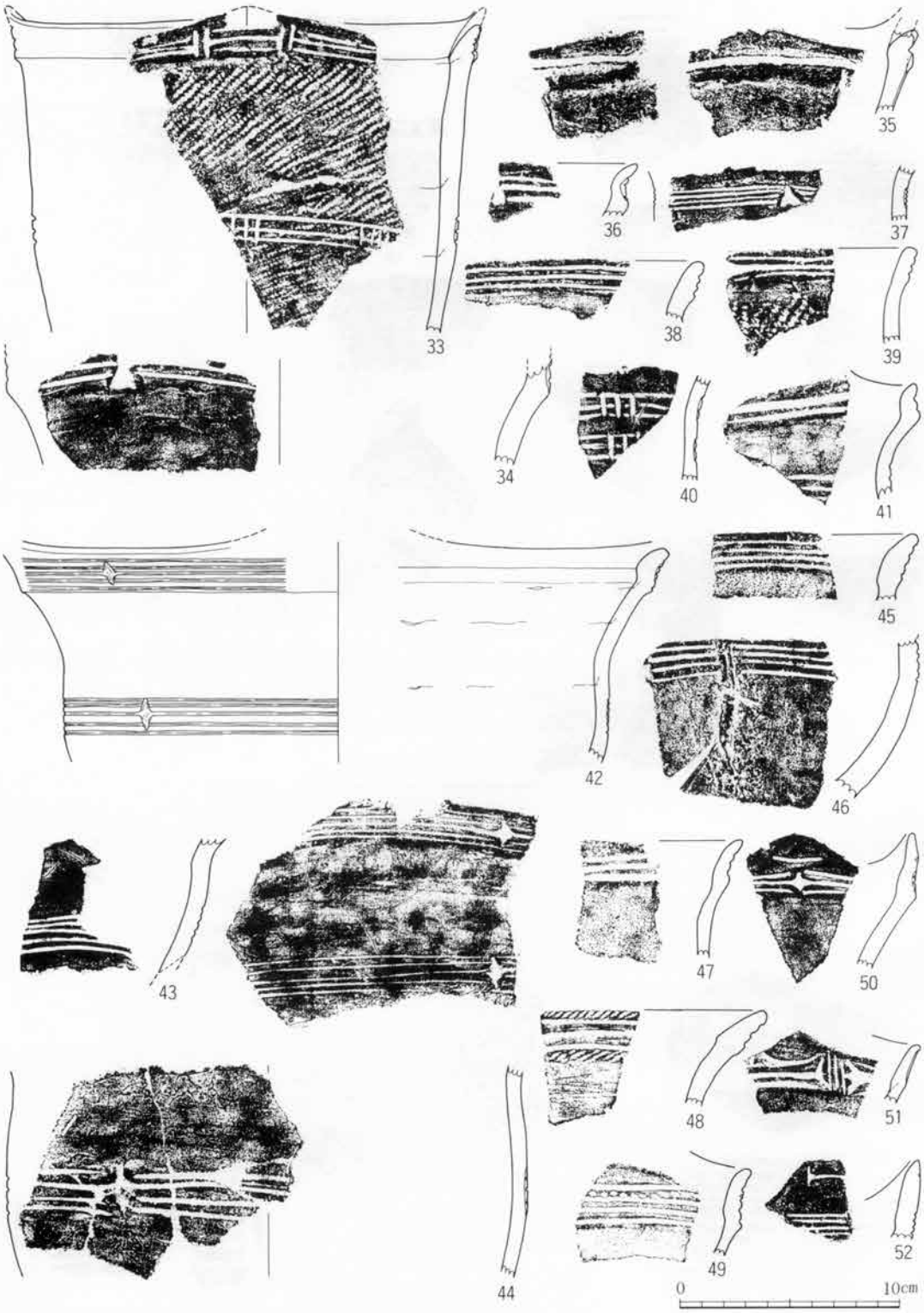
図番号	器種	色調外内	煤・赤彩	調整・施文文様、特記事項	砂礫量	その他	類型
		淡茶褐色		縦位短沈線		S赤多	
13 159 145	深鉢B2B①	淡灰褐色		摩、沈線、玉抱き三叉文	5 1 3 2	M赤中	3 a
160 176	深鉢	橙褐色	○外 面	摩、単節斜縄文RL、沈線	3 0 2 3	M生少	3 c
						M焼中	
161 140	浅鉢C1	灰褐色	○外 面	ナデ、単節縄文、沈線	3 1 3 2		2
162 151	浅鉢	暗灰褐色	○外 面	磨	2 0 3 2		3
163 148	深鉢A A	褐、暗褐	○外内面	磨、横位平行沈線	3 1 3 2		1
164 147	深鉢B B①	灰褐色、	○外 面	内ナ、外磨、沈線、玉抱三叉	3 1 3 2	M焼中	3 a
		茶褐色		文？			
165 152	深鉢E C	黄灰褐色	○外 面	外磨、内ナ、沈線、波状口縁	3 0 3 2		1
166 132	深鉢B3B②	灰褐色、		内ナ、外単節斜縄文LR？→	3 0 3 2	S赤多	3 a
		淡黄褐色		一部磨？、沈線、単独三叉文			
167 153	深鉢C1	橙褐色	○外 面	内ナデ、外単節斜縄文	3 0 2 3	M生中	3 b
168 143	深鉢	灰褐色	△内沈線	ナ、単斜縄LR、沈線、浮文	3 1 2 3	S赤多	3 a
169 154	（底部）	淡灰褐色	○外 面	内ナ、外摩、底1越2潜1送	3 1 3 2	M赤中	3 a
170 139	浅鉢C1	灰褐色	○外 面	内磨、外横位平行沈線	3 1 2 3	M赤中	3 a
171 175	（底部）	灰褐色		磨	3 0 2 3	M赤少	3 a

図番号	器種	色調外／内	煤・赤彩	法量、調整、特記事項、その他
4 1 222	有段口縁甕	黄橙色		口径30.6cm、摩耗、擬凹線10条
4 2 221	有段口縁甕	淡黄色、灰黄色		口径15.0cm、摩耗、擬凹線11条
14 172 223	くの字口縁甕	淡赤橙色、明褐灰	○外内面	口径18.6cm、口ナデ、胴外ハケ、内削り
173 215	くの字口縁甕	灰白色、淡黄橙色	○外 面	口径16.6cm、外ナデ・ハケ、内ナデ
174 224	くの字口縁甕	灰黄褐色～橙褐色	○内 面	口径19.6cm、口ナデ、胴外ハケ、内削り
175 218	くの字口縁甕	淡橙色	○外 面	口縁部ヨコナデ、頸部外面ハケ
176 214	くの字口縁甕	浅黄橙色～橙褐色	○外 面	口径15.5cm、口ナデ、胴外ハケ、内削り
177 216	有段口縁甕	灰白色～黄橙色	○外 面	口径17.0cm、口ナデ、胴外ハケ、内ナデ
178 213	有段口縁甕	灰白色～灰黄色	○外 面	口径16.8cm、外ナ、内口ナ、頸ハケ
179 219	くの字口縁甕	明褐灰色、褐灰色	○内 面	口径12.4cm、外口ナ、内口ハ→ナ、肩ハケ
180 212	小型壺	浅黄橙色		口径9.4cm、口ナデ、頸ハケ、胴摩耗
181 208	小型丸底壺	浅黄橙色		口径8.1cm、胴径9.5cm、器高8.8cm、ナデ
182 209	小型丸底壺	浅黄橙色～黄橙色		口径8.6cm、胴径9.6cm、器高8.3cm、口縁ナデ、胴部ハケ→ナデ

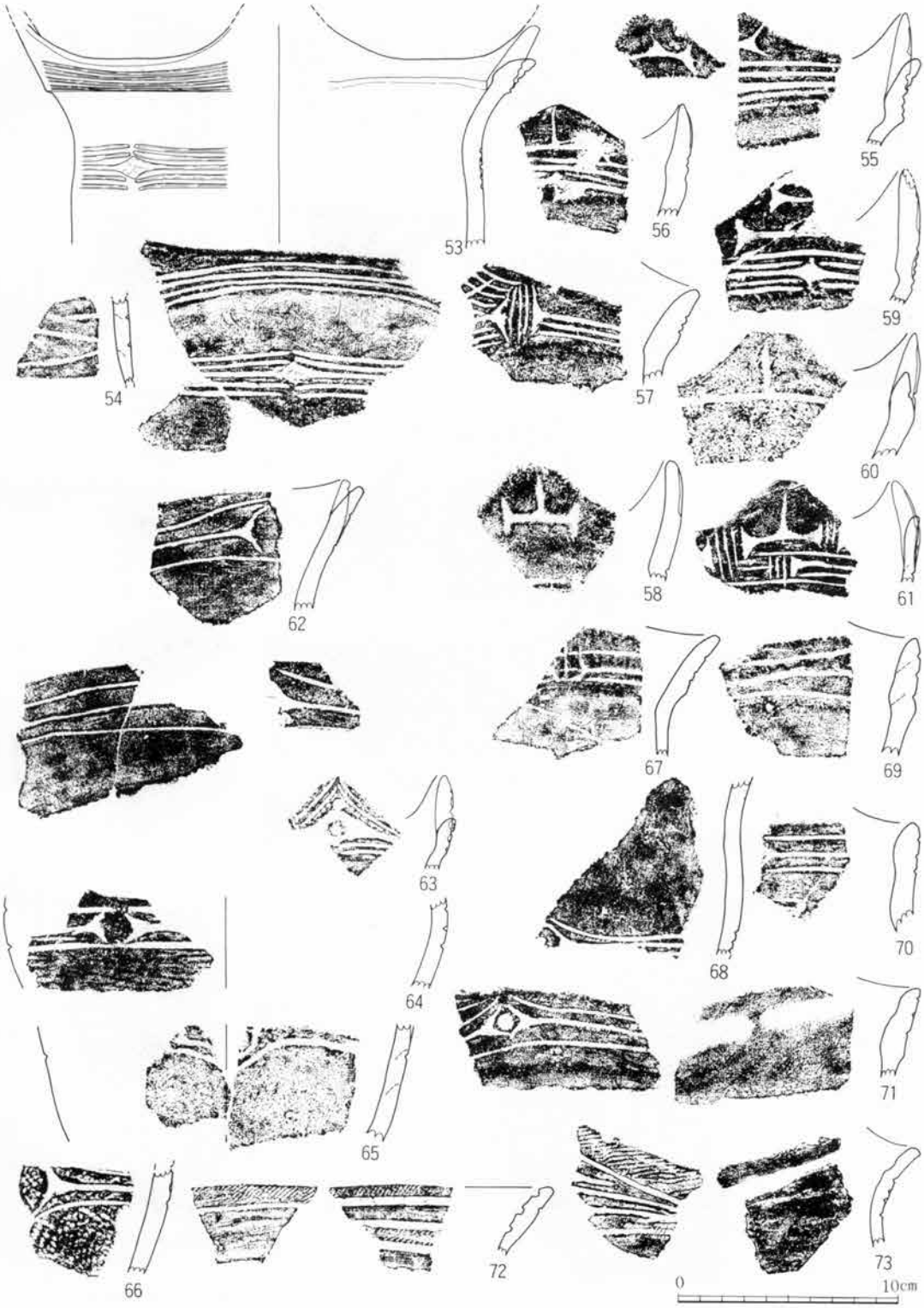
図番号	器種	色調外／内	煤・赤彩	法量、調整、特記事項、その他
14 183 210	小型丸底壺	浅黄橙色		胴径9.2cm、胴外ハケ→ナデ、内ナデ
184 211	小型丸底壺	褐色～橙色、黄橙色		胴径8.9cm、ナデ
185 203	高杯（杯部）	黄橙色	○外 面	口径16.4cm、口縁磨・ナデ、体部磨
186 207	高杯（脚部）	浅黄橙色		外磨、内杯ハケ→ナデ、脚ナデ
15 187 205	高杯（杯部）	灰白色～淡橙色		口径18.4cm、外磨耗、ハケ、内ハケ、摩
188 204	高杯（杯部）	浅黄橙色		口径18.0cm、外ハケ？、内摩耗
189 206	高杯（杯部）	浅黄橙色		摩耗（ナデ？）
190 220	甑（把手）	灰白色～淡橙色		ハケ、ナデ
191 217	甑（底部）	灰白色		底径6.8cm、外ハケ→ナ？、内削り→ナ？
192 201	須恵器杯蓋	灰色	○外内口	口径14.0cm、器高4.3cm、口縁ヨコナデ、天井外削り→ナデ、内ナデ
193 202	須恵器杯身	灰色		口径12.0cm、器高5.5cm、体～口ヨコナデ、底部外削り→ナデ、内当て道具痕→ナデ
194	板梯子			長59.4cm、幅13.1cm、厚2.7cm



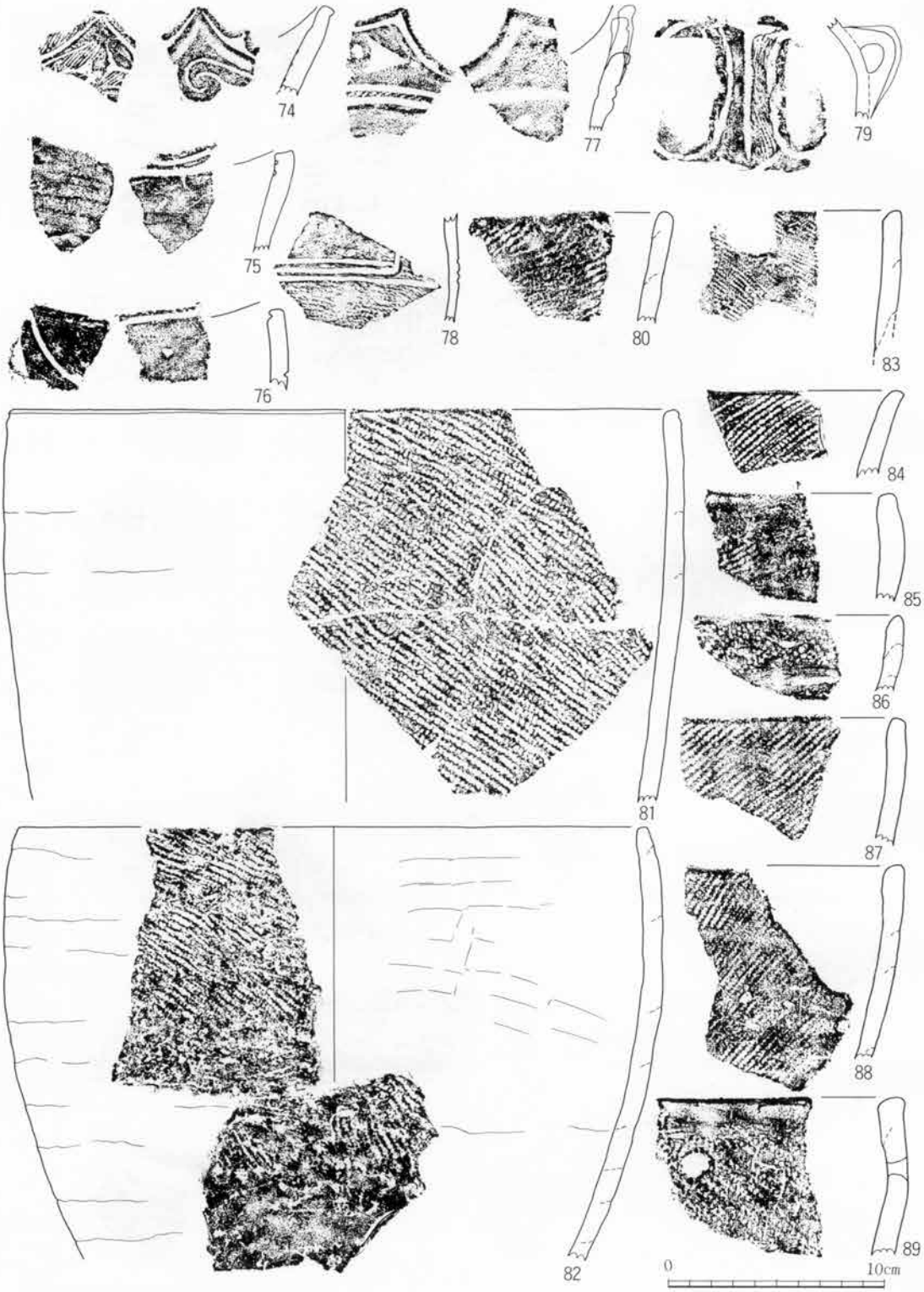
第6図　第2調査区出土土器（S＝1／3）



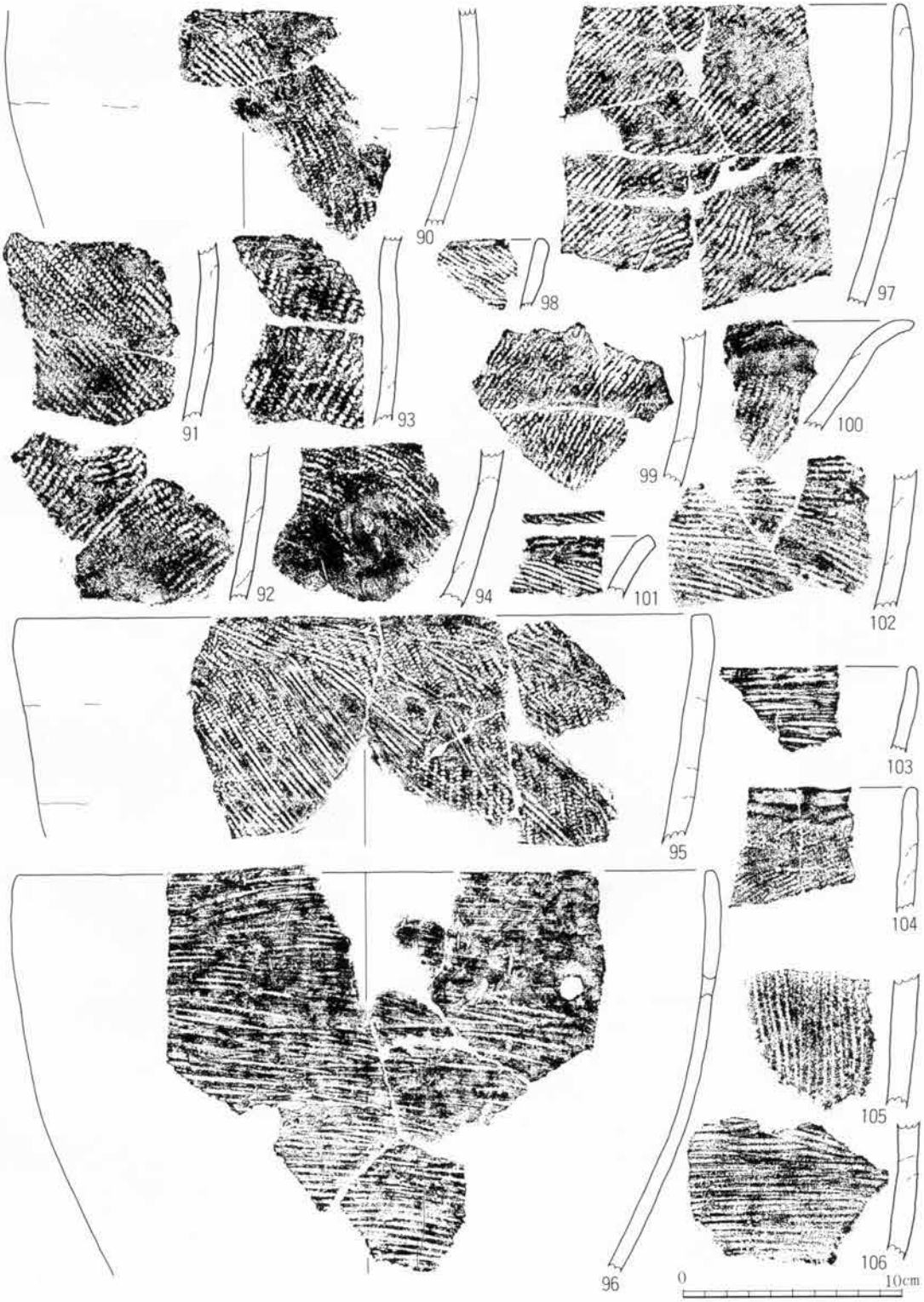
第7図　第2調査区出土土器　（S＝1／3）



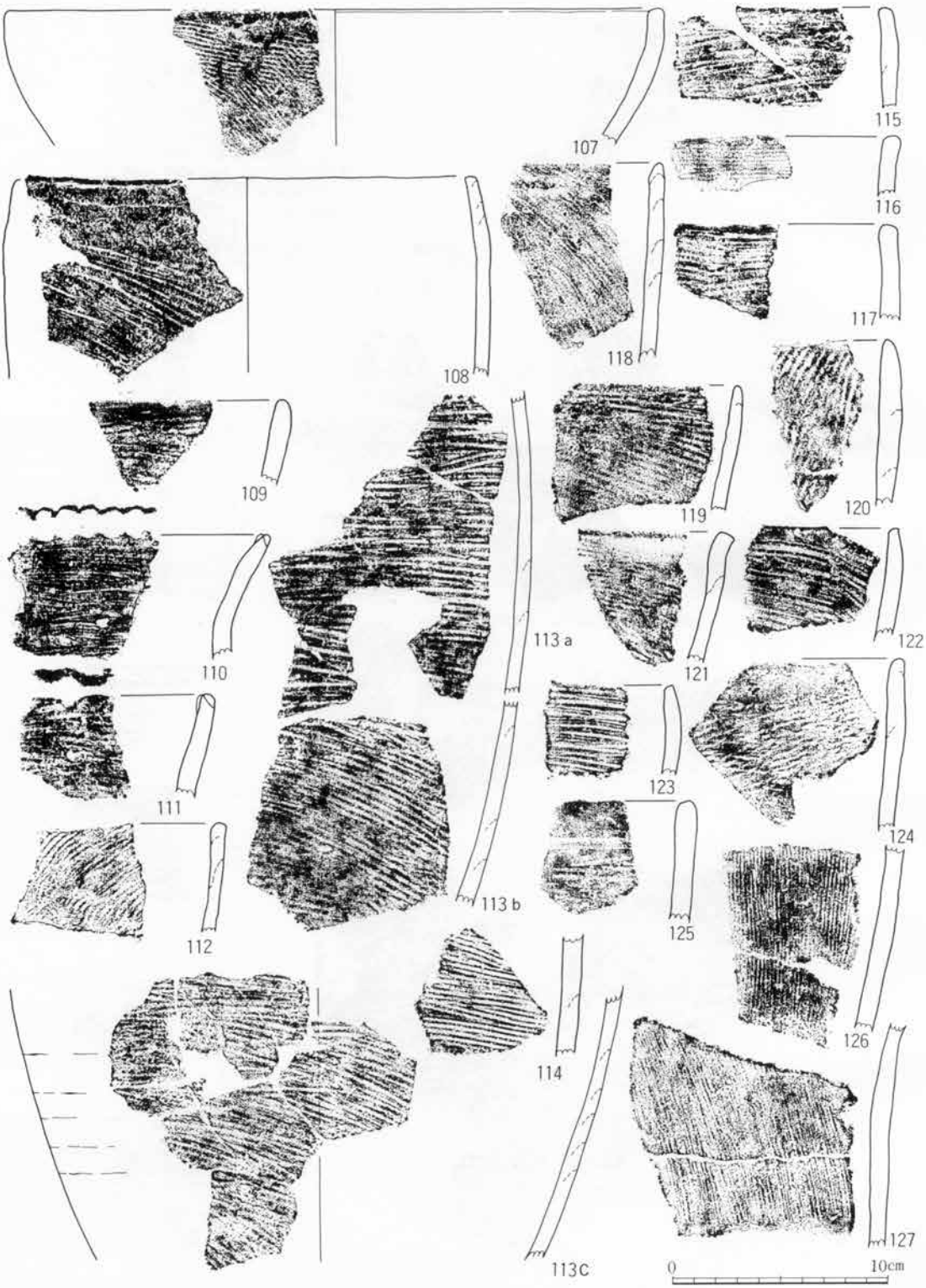
第8図　第2調査区出土土器　（S＝1／3）



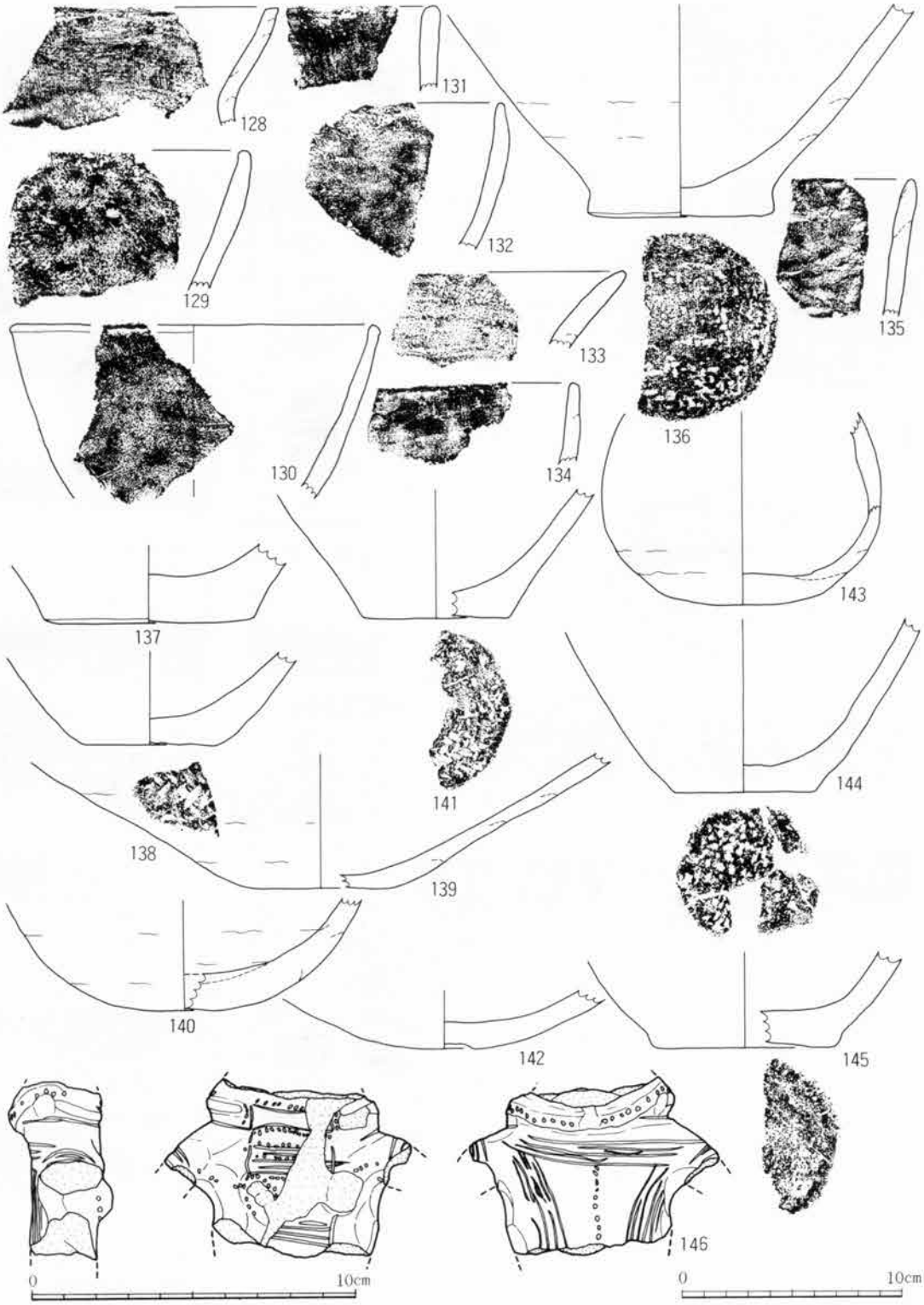
第9図　第2調査区出土土器　（S＝1／3）



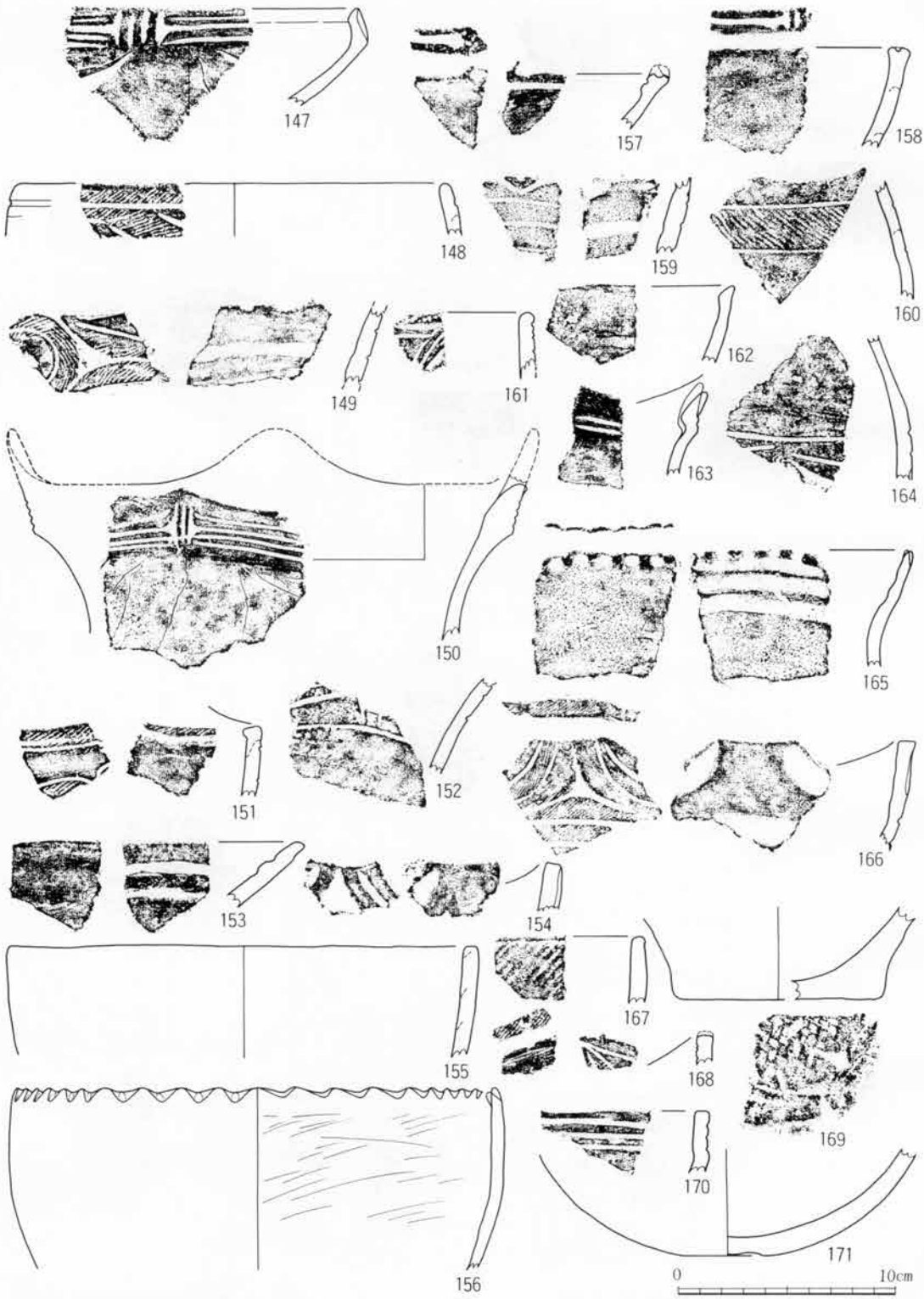
第10図　第２調査区出土土器　（Ｓ＝１／３）



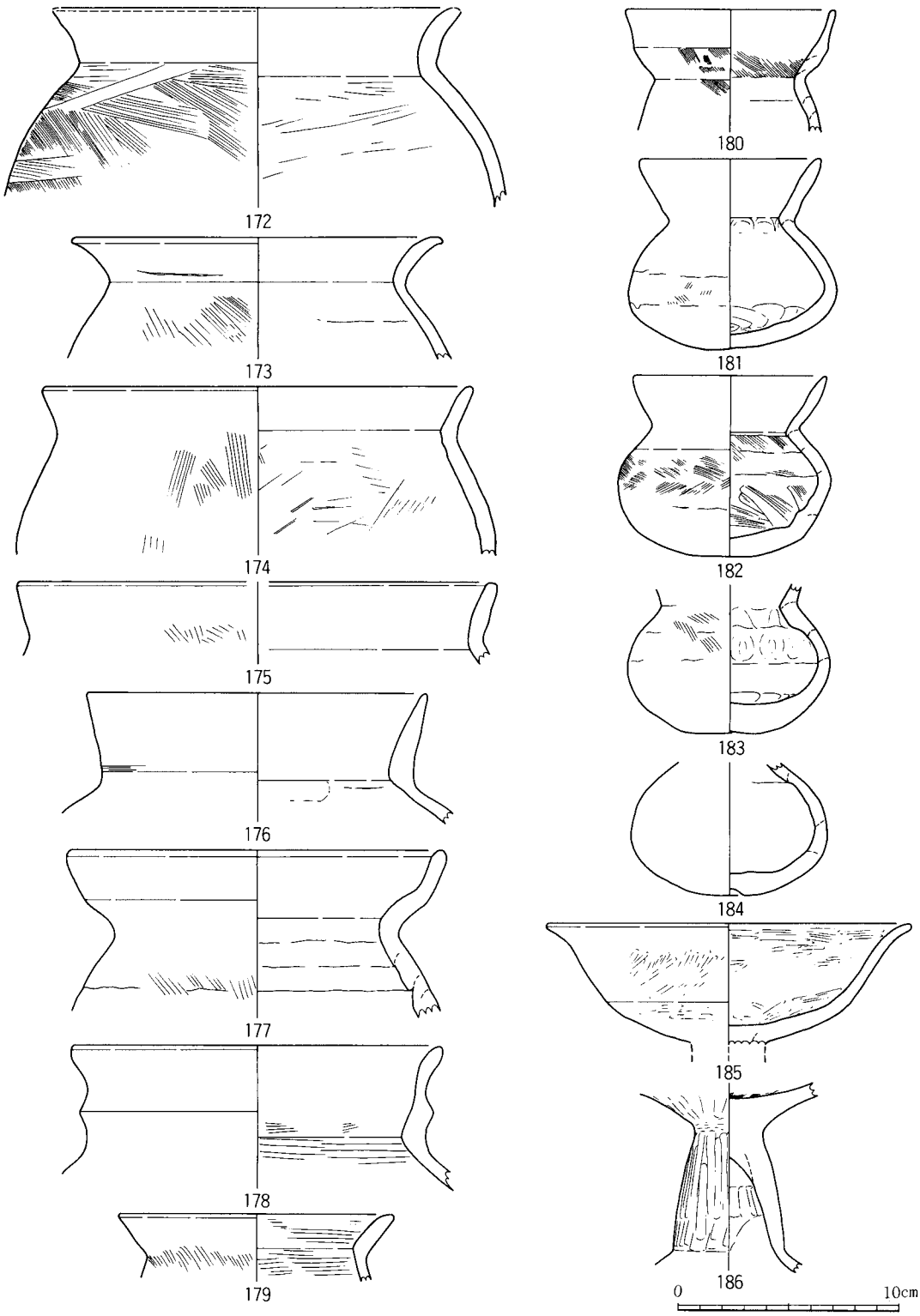
第11図　第２調査区出土土器　（S＝１／３）



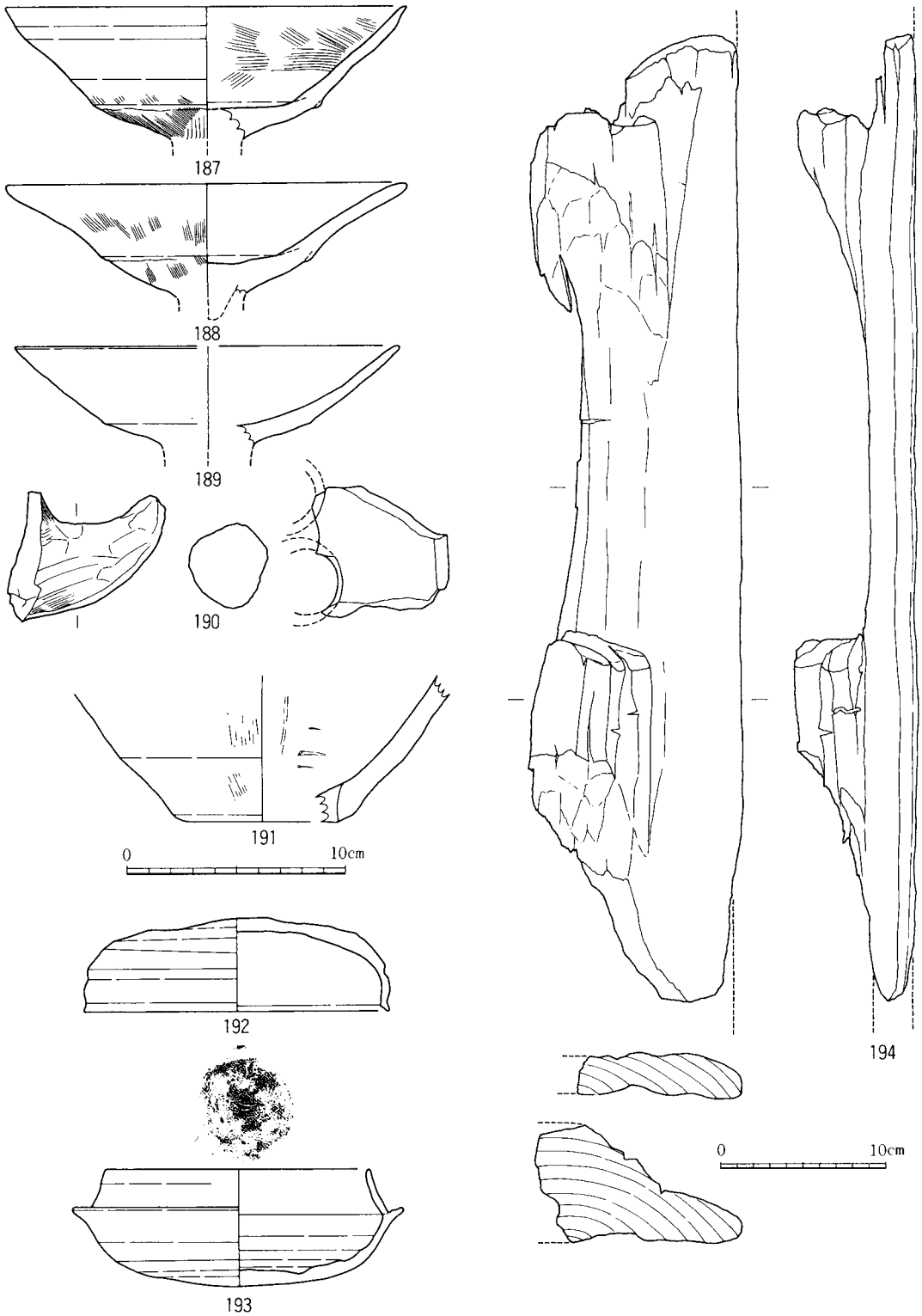
第12図　第２調査区出土土器（S＝１／３）、土製品（S＝１／２）



第13図　採集土器　（S＝1／3）



第14図　採集土器　（S＝1／3）



第15図　採集土器（S＝1／3）、木製品（S＝1／4）

第4章　まとめ

第1節　考　察

犀川鉄橋遺跡第3次調査出土の遺物には、縄文時代の土器・土偶、古墳時代の土師器・須恵器、木製品が存在している。これらの遺物の説明は、第3章で調査担当者の栃木英道氏によりなされている。ここでは縄文土器についてまとめてみたい。

最初に本遺跡からの土器出土地点を見ておきたい。先ず、昭和47年夏犀川河道から最初に発見され、金沢市立泉中学校に保管されている遺物は犀川右岸側河床から出土している。第1・2次調査地点も右岸側で、第3次調査地点は左岸側である。出土地点は右岸と左岸で各々離れているが、ほぼ同一遺跡と推定される。第1～3次調査での出土遺物をみると、第1・2次では縄文時代の土器等は少なくて古墳時代の土師器・須恵器が主体であった。逆に第3次調査では縄文時代の土器が主体で、同期の土偶も1点出している。遺物の出土している土層は、暗灰色・灰色・青灰色から褐色の粘質土・砂質土・砂層・礫層がそれぞれブロック状に堆積していた。このことは先の第1・2次調査報告書でも述べたが、洪水等により削られた遺物包含層等が、再堆積した可能性が高く、さらに出土土器も破れ口の摩耗度が少なく、器面にススや炭化物が多く付着していることから、現在の遺跡位置の上流域で、さほど離れていない地点に立地していたのであろう。しかし、その原位置を特定することは困難である。

さて、先に遺物の検出状況についてみたが、本題の縄文土器のまとめに移りたい。出土した縄文土器は、これまで本遺跡から出土しているものと同様に、縄文後晩期の八日市新保式から御経塚式にかけてのもので、八日市新保式が主体となっている。器種としては深鉢と浅鉢さらに注口土器と推定されるものが認められる。図版の順序から浅鉢からみたい。

浅鉢は大きくA・B・Cの3タイプに区分した。浅鉢Aは口縁部が屈曲するもの。Bタイプは波状口縁のもの。Cタイプは口縁部が内湾か直立するものである。Aタイプは形態と文様からやや細かくなったが①～⑦に細別した。各々の分類は次の通りである。浅鉢A①は口縁部が内屈するもの(1～3、147)。浅鉢A②は①と同様であるが、口縁部幅の狭いもの(4～7、14、16、17)。浅鉢A③は口縁部が肥厚せず沈線等を巡らすもの(8、9、11)。浅鉢A④はいわゆる口縁部把厚のもの(10、158)。浅鉢A⑤は口縁部を縁帯風にして弧線文を持つもの(12)。浅鉢A⑥は口縁部をヨコナデ調整のみ行うもの(13、15)。浅鉢A⑦は内面有文の浅鉢(153)。浅鉢Bは波状口縁のもの(29)。浅鉢C①は口縁部の縄文帯区画内に玉抱き三叉文を持つもの(25、27、28、148、さらに24もか)。浅鉢C②は口縁部に連結三叉文を持つもの(18～23、26、30～32)。この浅鉢Aを文様だけでみると口縁部を周回する沈線を棒状短線で切る(1)や粘土紐貼付の(6、7)。口縁部や口唇部に連結三叉文を施文する(10、11、16、17、147、158)。深鉢の可能性もあるが背中合わせの弧線を施文する(12)に分かれる。

口縁部を周回する平行沈線を棒状短線や粘土紐貼付で切る形態の文様は、連結三叉文の出現以前の文様と推定される。浅鉢Bは広く平坦な波頂部に二つの抉りによる三叉文を向かい合わせて連結三叉文としている。器形的には該期の波状口縁深鉢を意識して作られた器種と言える。浅鉢

Cは文様的には①の玉抱き三叉文を持つものと②の連結三叉文を持つものに区分される。②の連結三叉文には沈線でH形に施文するものと三角形の抉りを連結するものがある。その文様は上下に横位の平行沈線や弧線と組み合わさっているのが通例で、平行沈線の端部を丸めて笹の葉状にしているものも認められる。この浅鉢は文様から浅鉢A・B・C②は八日市新保式に、浅鉢C①は勝木原式から御経塚式に含まれよう。

深鉢は大きくA・B・Cの三つに区分した。深鉢A①は口縁部や胴部の平行沈線を棒状短線や三角形の抉りで切っているもの(33、34、36、37、40)。深鉢A②は波頂部に三叉状連結文(山字状文)、口縁部に連結三叉文や菱形の抉りを持つもの(38、39、42、44、50～53、55～61、150)。他の(35、41、43、45～47、49、163)は、深鉢A①か②に含まれる口縁部から胴部にかけての破片である。深鉢B①は玉抱き三叉文等を持つものをまとめた(62～68、70～74、77、149、159、164)。深鉢B②は波頂部外面のハの字状の沈線や縄文帯に囲まれた内に単独三叉文を持ち、内面にも浅く幅広沈線を持つもの(154、166)。深鉢Cは内面に幅広の浅い沈線を持つもの(165)。主体となるのは深鉢A・Bで、深鉢A①・②は八日市新保式に含まれる。波頂部に文様を持つ深鉢A②には、横位の沈線が1本だけの(50)。三叉文状連結文を下向きに施すもの(52)。三叉状連結の左右に弧線を持つもの(51、57)。三叉状連結文と連結三叉文を二段にして施すもの(59)。三叉状連結文と口縁部の連結三叉文との間に縦位短線を介在させてつながるもの(61)などがある。文様的にもバラエティーが認められる。また、口縁部の沈線数は3～5条が普通であるが、1本しかない(35、60)も存在している。器形の傾きは井口Ⅱ式からの系譜で(42、53)の形態が一般的な特徴である。その中にあって(33、35)は頸部の屈曲が認められず直立する器形となっている。これらは器形的特徴と胴部の文様が平行沈線を縦位短線で切る手法から、八日市新保式Ⅰ頃の所産と推定される。が、この深鉢や先の浅鉢の場合でもこの文様をもってしてすべてを八日市新保式Ⅰ式とすべきかどうかは再検討しなければならない。また、八日市新保式の深鉢は内外面をヘラミガキしているのが普通であるが、(33、39)は外面に斜縄文を持っている数少ない例である。(48)も口縁部の上下端に縄文を施すが、頸部から口縁部の外反度合からすると深鉢B①に含めた方がよいかもしれない。深鉢B①は玉抱き三叉文を持つものであるが、文様と器形から形態別に区分できそうであるが、八日市新保式の深鉢A①・②(42・53)の如く全形推定可能な破片が存在しないためひとまとめにした。ただ、現存する資料から文様帯構成を見ると、波頂部と口縁部の文様帯が合体しているため、波状口縁部と胴部の二段構成のようである。八日市新保式の如く波頂部と口縁部文様が分離してはおらず、波頂部下に文様が存在していても口縁部から延長しているものであったり、分離していても口縁部から延びる波線で取り囲まれたりしているなど(74、77、154、166)、八日市新保式のあり方とは異なる新しい傾向が見い出せる。口縁部と波頂部に玉抱き三叉文を持つようになると口縁部の形状や傾きが、八日市新保式の色合いから次第に御経塚式の波状深鉢の形態へと変遷するようである。

粗製深鉢では口縁部が直立するタイプが主体で、口縁部の外反するものは(100、101、110、121)と少ない。口唇部もナデ調整しているものが殆どで、口唇部に指頭圧痕等を加えているものは(110、111、156)と少ない。外面の調整は縄文・条痕文・無文があり、条痕文が多数を占め、その方向

は横位や右下りが中心で縦位方向も僅かながら認められる。次いで縄文、無文の順である。縄文の撚りはLRの方がやや多い。これらの粗製土器には外面にススが厚く付着しているものがあり、使用頻度が多かったようである。

近年この後晩期の土器編年は、西野秀和氏、南久和氏の研究成果から進展している。西野氏は鶴来町白山遺跡・白山町墳墓遺跡報告書で、北陸の晩期の始まりについて東北地方の縄文晩期の三叉文の形態との関係から、それの北陸への影響とそれを取り入れた地元の土器群の文様から、勝木原式をもって晩期の始まりと指摘している(註1)。また、南氏は金沢市新保本町チカモリ遺跡報告書で、八日市新保式の三叉文は口縁部や胴部を巡る沈線を短線や粘土で寸断する手法から発生した寸断文であり、三叉文の角度も90°であるのに対して、勝木原式の玉抱き三叉文の角度が120°になり、東北地方の三叉文との関係から晩期の始まりを勝木原式とし、さらに同式を御経塚式の第1段階と捉えている。それは同書中の八日市新保式から御経塚式への土器変遷図で、深鉢A系列(八日市新保式)の5段階に波頂部と胴部に玉抱き三叉文を持つ御経塚遺跡出土の土器を当てている。この土器の口縁部の形態や胴部文様のあり方からすれば、八日市新保式深鉢の系譜上に位置するものであり、深鉢C系列5段階の富山県勝木原遺跡出土の深鉢とは、口縁部に縄文を施文しない、胴部文様として複数の縄文帯や胴下半に縄文を施文しないなどの面で系譜を異にする違いが認められるが、口縁部の外反度合の強まりと玉抱き三叉文の施文と描出角度の120°化、波頂部の台形化などから御経塚式の始まりとされている。御経塚式の波状口縁深鉢は波頂部が台形を呈しており、それが次第に平縁化して中屋式に変化するが、御経塚式の波状口縁深鉢の出現を見る上で重要な指摘である(註2)。筆者はこれまで晩期は八日市新保Ⅱ式と勝木原式が併行して始まるものと考えていた。本遺跡第1・2次報告書で編年表を掲載したが、東北地方の三叉文の形態とそれの取り入れた北陸の土器群の関係からすると訂正する必要があろう。

新保本町チカモリ遺跡報告書変遷図の深鉢A系列5段階の土器や、それと類似することが推定される本遺跡の深鉢B(62、65、67～70)などの形態・文様・玉抱き三叉文の存在からすると、縄文使用が少なく施文角度が90°の三叉状連結文や連結三叉文で特徴づけられる八日市新保Ⅱ式は、後期に上る可能性が高い。この深鉢B(62、65、67～70)などの縄文使用が無い土器は、南氏の深鉢C系列5段階の勝木原遺跡出土土器の縄文を多用する土器とは系譜が異なるながらも存在し、深鉢B(74)などは勝木原遺跡出土品に近く東日本系の系譜が強いのであろう。出土資料が少ないためにこれ以上の言及は控えるが、西野氏や南氏の研究成果から八日市新保Ⅱ式は後期末で大過ないであろう。晩期の始まりについては玉抱き三叉文を持つ勝木原式や半肉彫り三叉文が特徴の富山県岩瀬天神遺跡出土土器などを含めての検討が必要であろう。

非常に雑駁としたまとめとなりましたが、執筆の機会を与えて頂いた栃木英道氏に感謝申し上げます。

註1　西野秀和　1985年　「第6章　第1節縄文土器の概観について」『鶴来町白山遺跡・白山町墳墓遺跡(Ⅱ)』石川県立埋蔵文化財センター

註2　南　久和　1986年　「考察の部　2、北陸の後・晩期の時間列について」　『金沢市新保本町チカモリ遺跡―第4次発掘調査兼土器編』　金沢市教育委員会

その他の参考文献に関しては紙数の関係から割愛しました。

第2節　おわりに

本書は犀川環境整備(河道整備)事業にかかる石川県金沢市犀川鉄橋遺跡の第3次発掘調査（昭和60年(1985年)）報告書である。第1次・第2次発掘調査は、石川県立埋蔵文化財センターが昭和54年(1979年)と昭和56年(1981年)に実施し、昭和57年(1982年)3月、『金沢市犀川鉄橋遺跡第1・2次発掘調査報告書　犀川環境整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書第1集』を刊行している。本書は本遺跡の発掘調査報告書としては第2冊目となる。

本遺跡の発見は昭和47年(1972年)7月の中学生による縄文土器採集に遡るが、現況が河床であることから人々の注目を集めるところとなった。犀川は浅野川とともに金沢市内を貫流する二大河川のひとつであるため、分布調査を含め過去のほとんどの作業は渇水期(7～8月)に実施されている。それでも第1次調査は降雨による犀川の増水のため、排土(礫)による堤防が崩れ調査区が河道となりそのまま終了を余儀なくされている。第3次調査では、遺物包含層を覆う礫層(厚さ1～3m)を周囲を盛りあげ増水に備えた。調査面からの高さは最大で5mほどにもなった。しかしながら、その年の夏は梅雨明けが宣言された調査開始日(7月17日)から連続53日という真夏日の新記録を樹立し、調査中はついに一滴の雨も降らなかった。炎天下、無風、礫の照りかえしと涌水の蒸発によって、調査区は終日蒸し風呂のような状態であった。この間調査は終始金沢大学学生有志によって精力的に進められた。彼らと彼らのために休憩時に日陰を提供していただいた地元住民の方々に深謝の意を表したい。

本書がなるにあたっては多くの方々から指導・助言を得た。第1次・第2次調査同様遺構が検出されなかったため、主として出土した遺物(採集品を含む)についてであるが、特に縄文土器、土製品については、西野秀和、南久和、米沢義光、松山和彦、久田正弘の各氏から、土師器、須恵器については、田嶋明人、北野博司、木立雅朗の各氏からそれぞれ教示を得その研究に学んだ。縄文土器の観察については、辻森由美子氏をはじめ(社)石川県埋蔵文化財整理協会の担当職員の方々の記録に負うところが大であるが、特に胎土の観察については、その目的や方法等を中心に奥田尚、田嶋、北野の各氏から教示を得るとともに、その研究や話し合いのなかから多くを学んだ。本書において不十分な点はすべて私の浅学の故であるが、もし益するところがあるとすれば、それは上記の諸氏に帰すべきものであり深く感謝する次第である。

本遺跡はＪＲ北陸本線犀川鉄橋より一望にすることができる。年々整備されていく車窓の風景からはすでに往時の景観は望めなくなったが、今後も身近な遺跡のひとつとして、折にふれて河床から顔を出した土器が人々の目を引きつづけることだろう。

図　　版

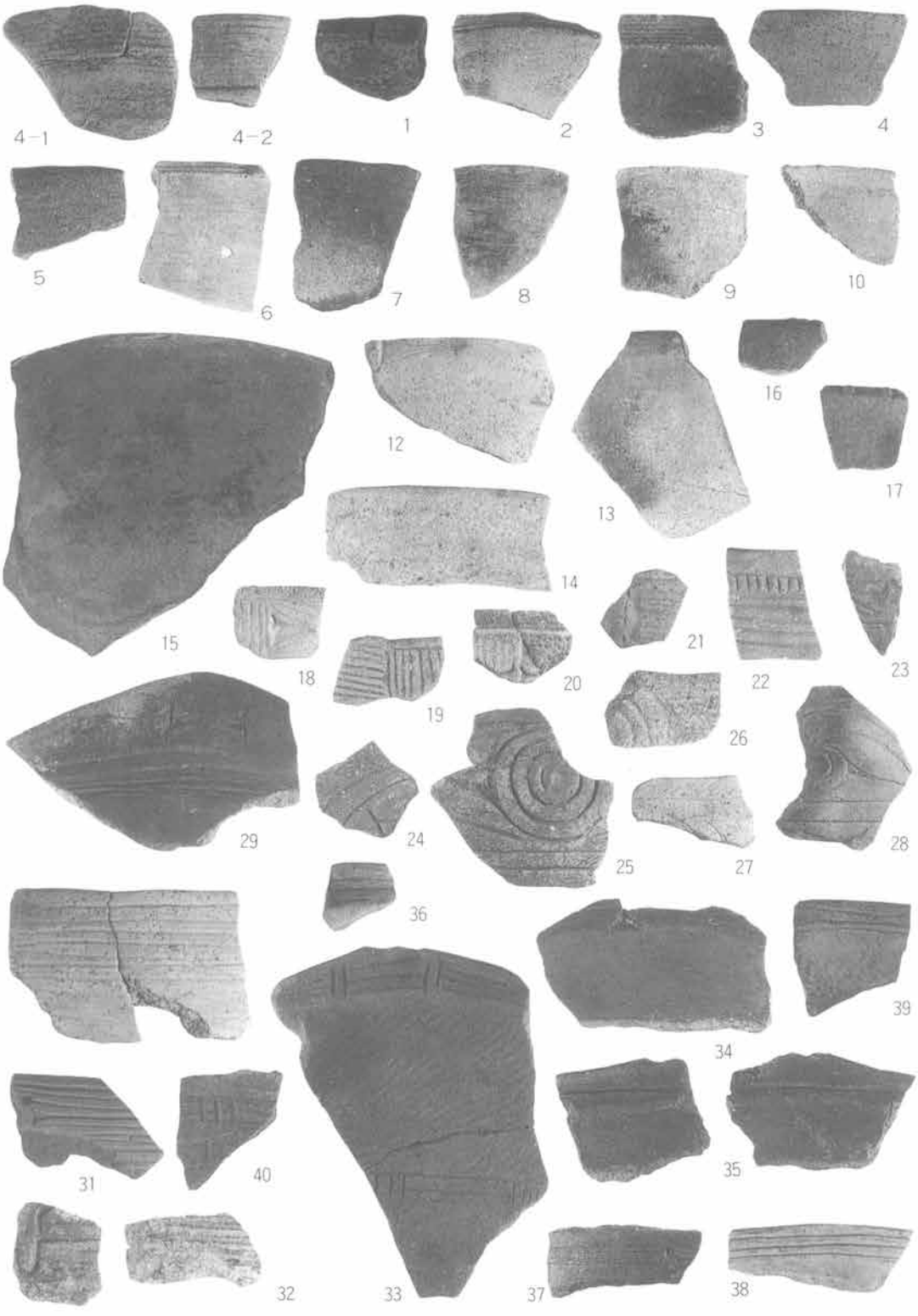
（図版中の遺物番号は、本文、挿図、観察表の遺物番号に一致する）

遺跡（○印）とその周辺（1947年撮影）

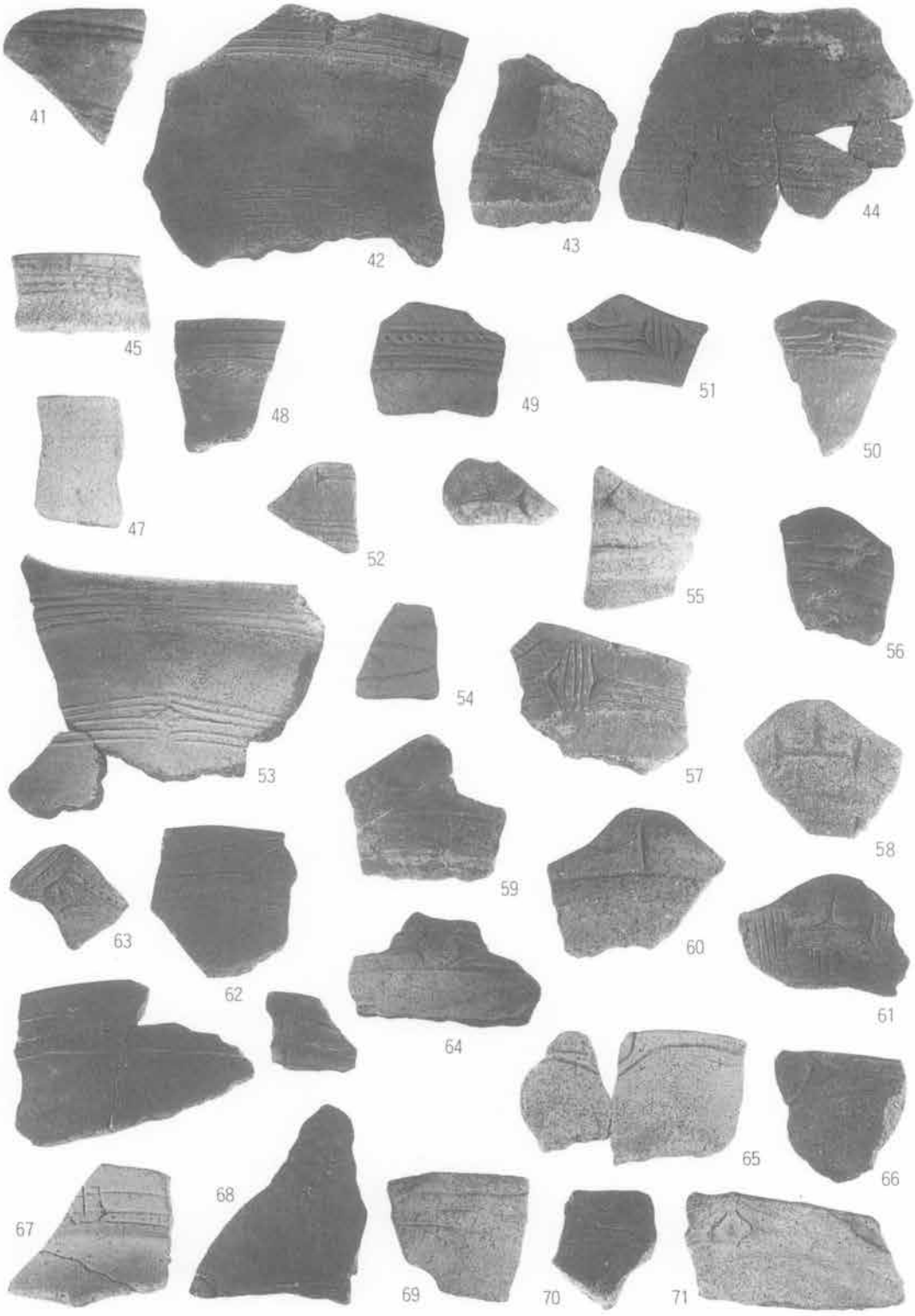
図版第 2　調査区

第 2 調査区（東より）

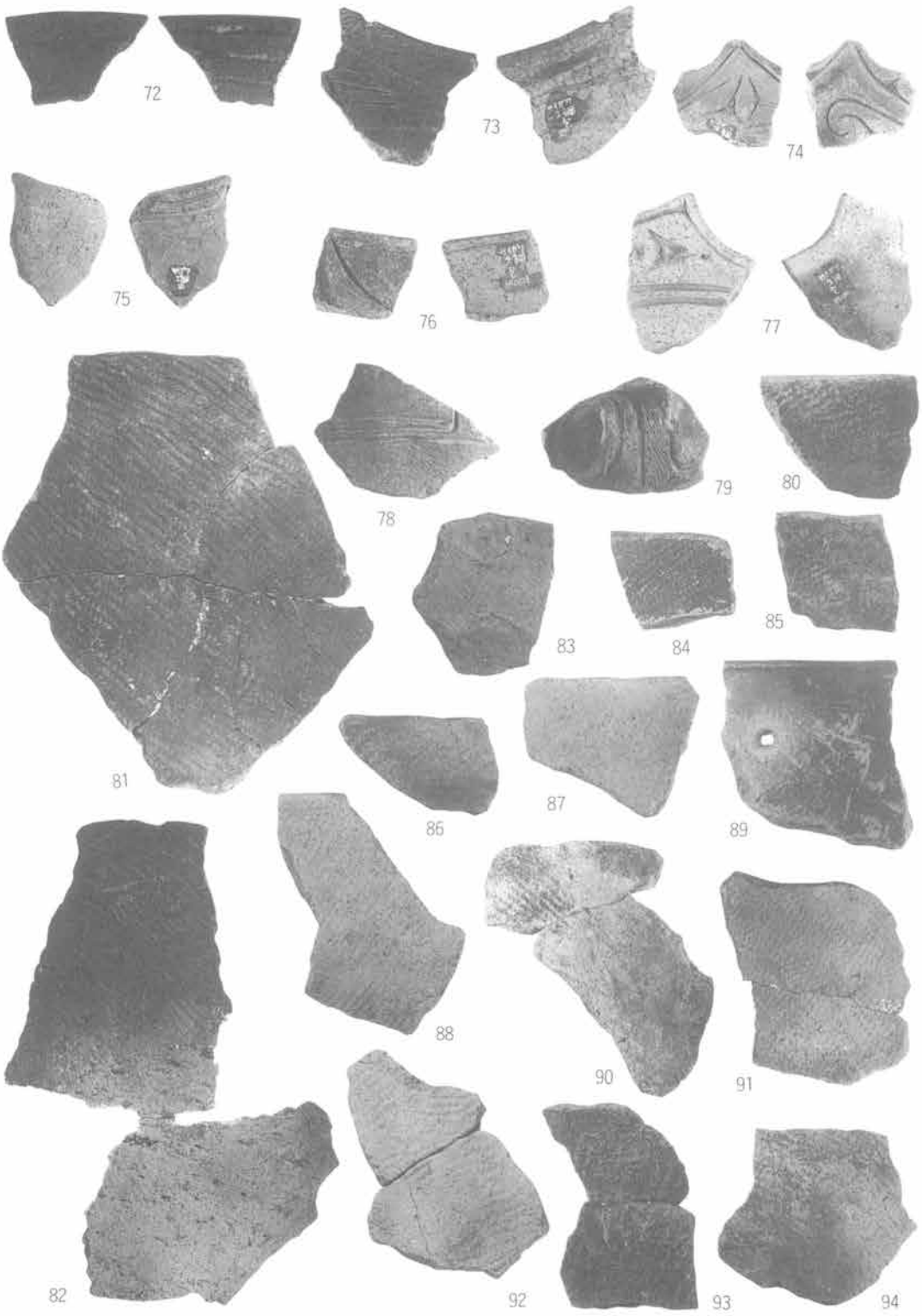
第 2 調査区調査風景（西より）


4−1
4−2
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
12
13
16
17
14
15
18
19
20
21
22
23
29
24
25
26
27
28
36
34
39
31
40
35
32
33
37
38

第１・２調査区出土土器

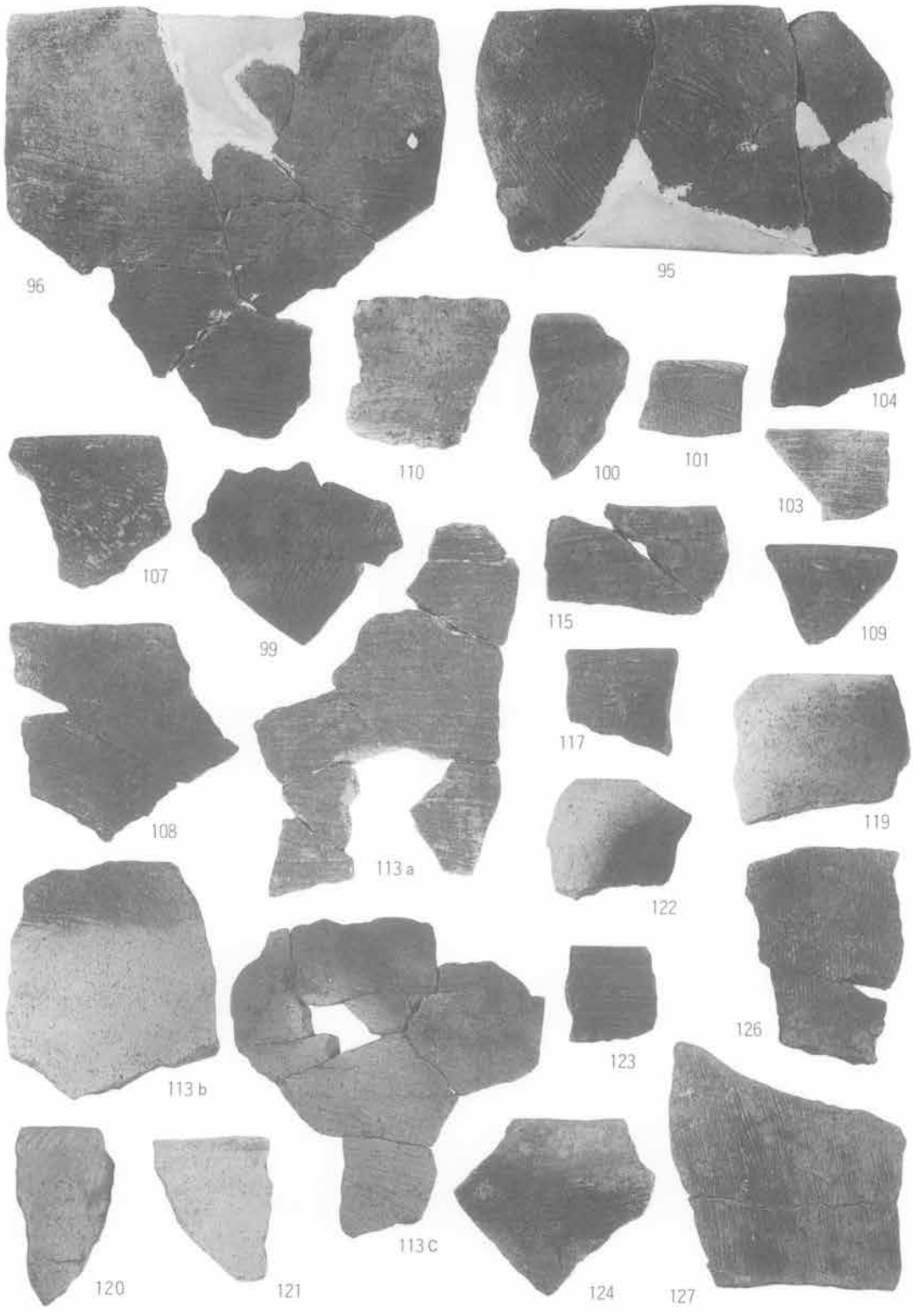

41
42
43
44
45
48
49
51
50
47
52
55
56
53
54
57
58
59
60
63
62
61
64
65
66
67
68
69
70
71

第 2 調査区出土土器

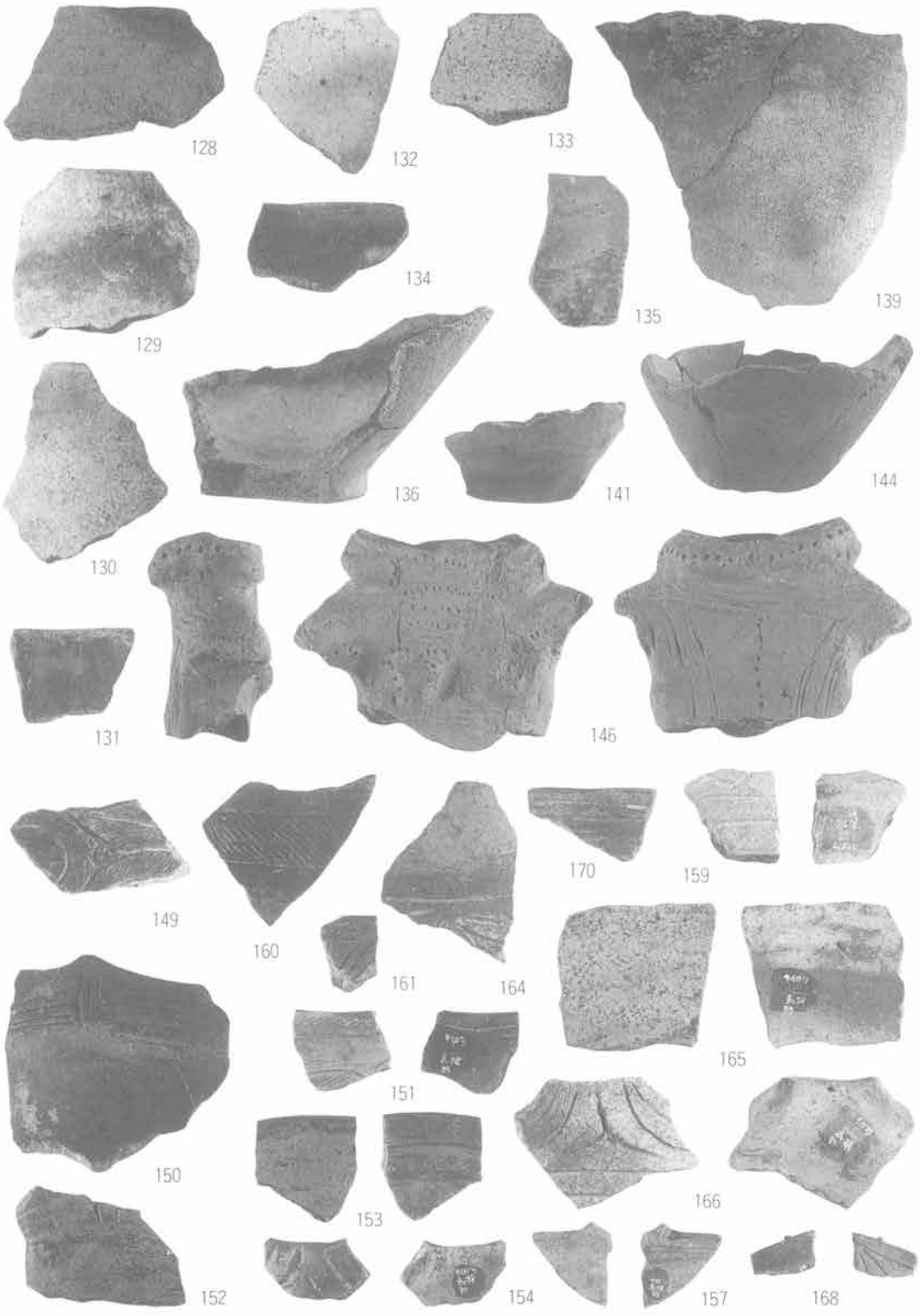


第 2 調査区出土土器

図版第 6　遺物

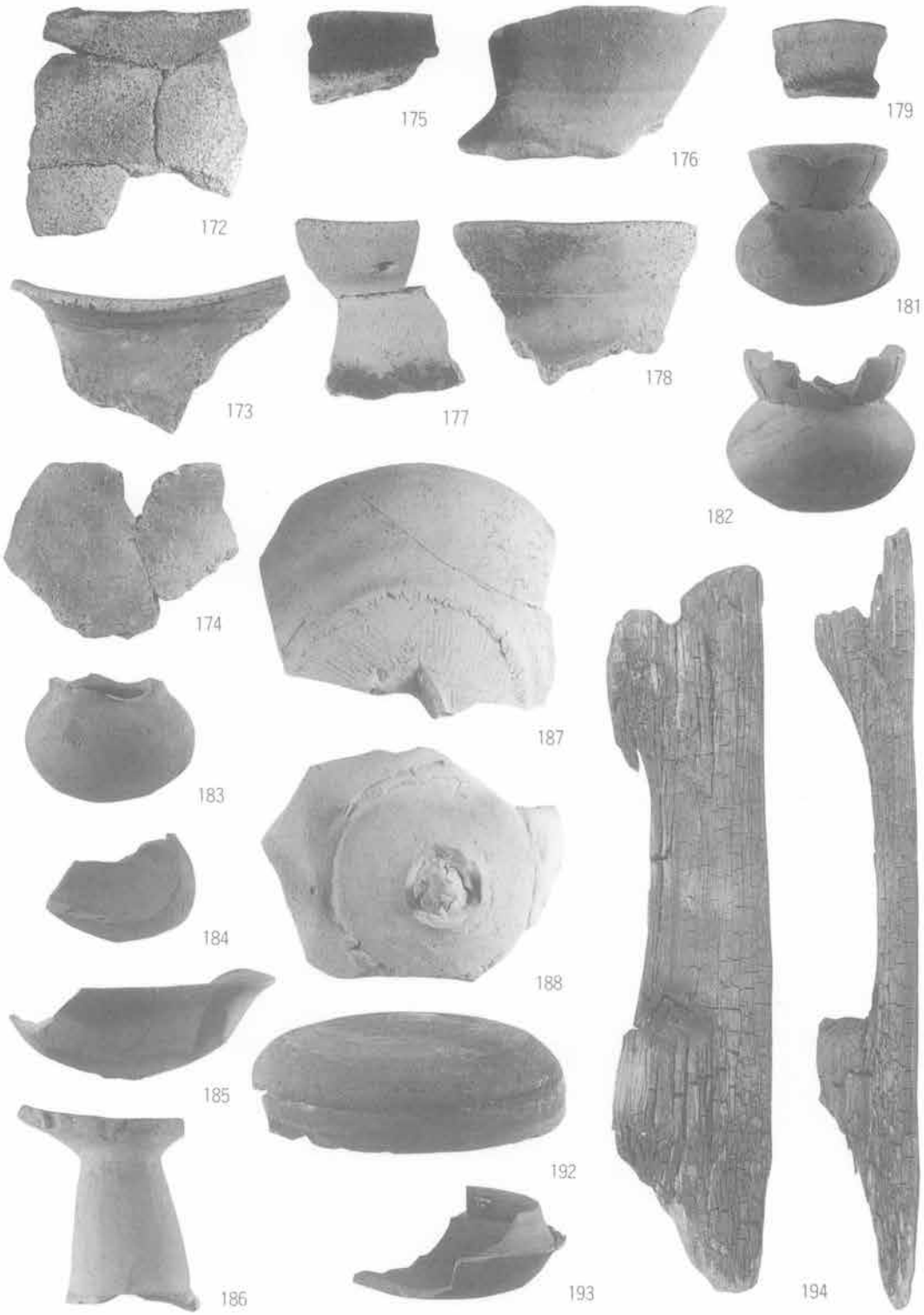


第 2 調査区出土土器



第２調査区出土遺物・採集土器

図版第 8　遺物



採集土器・木製品

犀川鉄橋遺跡II

平成元年3月27日　印刷
平成元年3月31日　発行

編集・発行　石川県立埋蔵文化財センター
石川県金沢市米泉町4丁目133番地
〒921　電話（0762）43－7692番(代)

印　刷　北国書籍印刷株式会社

© 石川県立埋蔵文化財センター　1989
本文用紙：書籍用紙イエローＡＰ　72kg
表　紙：レザック　215kg
写真図版：ダイヤホワイトＡＰ　130kg